



文部科学省委託事業「帰国教師ネットワーク構築事業」

国際理解教育等実践事例紹介

2022年3月

公益財団法人 海外子女教育振興財団

本書刊行にあたって

近年急速に発展してきた経済社会のグローバル化に伴い、国の将来を担うグローバル人材の育成が大きな目標として掲げられています。併せて、小学校での外国語教育の早期化・教科化や増大する外国人児童生徒への対応も急務とされるなか、これらを教育現場で担う教師についても、グローバルな視点や専門性を持ち、多様な価値観や文化を尊重する心を養う指導ができる「グローバル教師」が必要とされてきております。

これまでも政府派遣教師の皆様におかれましては、「外国語活動」「現地との交流活動」「国際理解」「多文化共生」「各国の歴史」といった在外教育施設ならではのテーマに係る実践を行い、また、帰国後もその貴重な経験を活かした取組を行ってこられました。昨今の「グローバル教師」のニーズの高まりを受け、グローバル教師育成をさらに強化・充実したものとし、好循環を作るための仕組みとして、文部科学省では2017年8月に「トビタテ！教師プロジェクト」を立ち上げました。

同プロジェクトは、在外教育施設の機能強化を図り、政府派遣教師の「派遣前」「派遣中」そして「帰国後」の各々における魅力を高め、戦略的に教師のグローバル化を目指すものであり、その一環として、2018年度に「帰国教師ネットワーク構築事業」が打ち出されました。弊財団ではこの事業の委託を受け、在外教育施設に派遣された教師が異文化の中で体験・実践してきた21世紀に必要な資質・能力を育む取り組みが帰国後の教育活動の中で活かされることを目的とした支援活動を行うとともに、政府派遣教師のグローバルな資質・能力・スキルのさらなる向上のための成果の発信、共有化を行うための事業を実施しております。

具体的には、「在外教育施設」や「日本国内の学校」で実施している教育実践について、学び、考える場として、『グローバル教師フォーラム』の開催（2020年度・2021年度はコロナ禍で中止）および、政府派遣教師が取り組む在外教育施設および帰国後の学校におけるグローバル人材育成に資する各種研究報告や海外子女・帰国子女教育、外国語教育および国際理解教育等の専門的な知見を有する有識者の講演動画をご紹介します『グローバル教師ポータルサイト』の運営を行っております。

このたび、多くの皆様よりご要望をいただきました海外の教育現場での経験を活かした日本国内での実践に関する報告書を刊行することといたしました。是非こちらを参考に、在外教育施設での教育に挑戦され、また、国内での教育実践に活かしていただけましたら幸いに存じます。そして、本書が教師の皆様にとりまして、今後の海外子女・帰国子女教育の発展にお役立ていただけるものとなりましたら、本事業の実施者として、これに勝る喜びはありません。ここに、本実践事例紹介にご協力いただきました皆様に、あらためまして厚く御礼申し上げます。

弊財団では引き続き、教師のグローバル化に向けた支援に取り組んでまいります。今後とも皆様のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

2022年3月

公益財団法人 海外子女教育振興財団
理事長 綿引宏行

- 相手の母語からはじめる、体温を感じる国際交流** 北海道芽室町立芽室南小学校 中島 緑郎 ● 1
ヨハネスブルグ日本人学校 / 2012年帰国
- 世界の問題解決と「未来のスキル」を考える** 新潟県長岡市立才津小学校 渡辺 登 ● 7
ロンドン日本人学校 / 2013年帰国
- 「谷根千おもてなし課」が地域の課題に取り組む** 東京都文京区立千駄木小学校 多田 亮介 ● 13
キナバル日本人学校 / 2014年帰国
- 社会にアクセスする教育を、人とのつながりから生み出す** 岐阜県大垣市立星和中学校 早崎 史朗 ● 19
パリ日本人学校 / 2018年帰国
- 海を越えて「桜」がつなく日本の心** 岐阜県大垣市立北小学校 大前 忍 ● 25
プラハ日本人学校 / 2019年帰国
- 小学校英語教育と小中連携、ICT 活用** 兵庫県宝塚市立南ひばりが丘中学校 高木 浩志 ● 31
上海日本人学校 / 1994年帰国
- ラオスの不発弾から工業生産と世界の未来を考える** 広島県熊野町立熊野第一小学校 中村 祐哉 ● 37
上海日本人学校虹橋校 / 2014年帰国
- 青少年交流の家という「場」で実現した国際理解教育** 広島県立生涯学習センター 社会教育主事 武原 智明 ● 43
カイロ日本人学校 / 2009年帰国
- 現地でのつながりから高知と上海の高校生交流を実現** 高知県立高知東高等学校 尾崎 靖司 ● 47
上海日本人学校浦東校 / 2019年帰国
- 「いとすぎ植樹祭」で偏見のない社会を目指す** 愛媛県今治市立吉海小学校 寺尾 満寿男 ● 53
ボンベイ日本人学校（現ムンバイ日本人学校） / 1987年帰国 北京日本人学校 / 2018年帰国
- 世界があるから英語が楽しい** 愛媛県松山市立たちばな小学校 加藤 亜紀子 ● 57
バンコク日本人学校 / 2008年帰国
- ちょっとした違和感から学ぶ国際理解のための教材集** 鹿児島県大崎町立菱田小学校 福森 真一 ● 63
ジョホール日本人学校 / 2011年帰国



相手の母語からはじめる、 体温を感じる国際交流



中島 緑郎

現在の勤務校等
北海道芽室町立芽室南小学校

在外での勤務校／帰国年月
ヨハネスブルグ日本人学校／2012年帰国

世界各地からきている JICA 研修員を 10 名程度迎え、各学年・学級に分かれて小人数で交流をおこなった。異文化交流の目的は国の違いを知ることではなく、こんなに違っても同じ人間だということを実感することである。そのためにあえて英語ではなく相手の母語と「体温を感じる距離」の交流にこだわった。



実践・活動の内容

大樹小のある北海道大樹町から近い帯広市には JICA 研修拠点があり、世界各地から研修員が集まっている。JICA の学校訪問制度を活用して、その研修員を学校に招いて交流を実施した。JICA 学校訪問は多くの場合 1 名か 2 名で、全校集会での講演と型どおりの質疑応答であるが、それでは式典であり国際交流にならないと考えたので、本実践ではなるべく多くの研修員派遣を希望し、全校交流に続いて研修員を各学級に振り分けて交流時間をとった。

当日参加する研修員のメンバーが決まると、その国籍を教えてもらった。5・6年生が国ごとに調べて模造紙にまとめ、当日はそれを体育館の壁に貼りだした。ほかの学年でも、そのクラスに来る予定の研修員の出身国について調べ学習をおこなった。また、自己紹介用の名刺を作り、質問を英語でまとめた。

訪問予定の研修員とは事前に顔合わせをし、自宅にも招いてコミュニケーションをとった。「訪問先には中島がいる」と安心してもらう材料になったと思う。可能なら民族衣装を着用してほしいとも要望した。研修員には自分の母語の「Hello, Thank you, 1～10 までの数字の読み方」を提出してもらい、当日の全校交流のアイスブレイクの時にクイズの題材に使った。

朝研修員を迎えてまず全校交流。体育館の壁には、児童が調べ学習で作成した各国についてのポスターが掲示されている。JICA 紹介や大樹小 6 年生の英語による大樹小紹介につづいて、「研修員自己紹介クイズ」を実施。まず国名を言わずに自己紹介をしてもらい、「この人の国では、1 から 10 までの数字を●●、●●…と発音します。さてこの人はどこから来た人でしょう？」とクイズを出す。児童は自分が推測した国のポスター前に移動して待ち、研修員が自分の国のポスターに歩み寄ってそこに集まっている児童とハイタッチをする。単に挙手してクイズに答えるのではなく、ポスター前に歩いて移動するという動作を取り入れたことで場の雰囲気が明るくなり、自然に盛り上がった。これを研修員全員分繰り返した。

その後、休憩をはさんで各学年・学級で55分間交流した。研修員と学級のマッチングにあたっては、その学年の他教科の学習との関連などから、事前に「民族楽器を学ぶので●●国の人がいよ」などの希望をとるようにした。学級で昼食を一緒にとって、昼休みにさよならセレモニーとして「We are the world」を一緒に歌って終了。児童は教室の窓などから見送った。

平成27年8月17日
外国語活動担当：中島

JICA 研修員学校訪問実施計画（案）

1. 名称 JICA 研修員学校訪問
『小学校理科教育の質的向上（「教と学び」の現場教育）』コース研修員

2. 目的

- ・多種多様な文化に直接触れることで、広い世界を感じとり、選んで新しいものや未知のものに積極的にかかわろうとする態度を育てる。（全学年）
- ・体温を感じる交流を通じて、世界の人々の違い・共通点について考え、差別や偏見のない社会を築くために自分はどう生きるべきかを考える機会とする。（高学年）
- ・外国語活動で学んだ英語によるコミュニケーションを実践し、学習意義を理解する。（高学年）

※児童には、『新しい異国に来ておぼえる外国の人に、日本での楽しい思い出を作ってもらおう』という思いやりや、自分たちの行動や笑顔が社会貢献・国際貢献に役立つものであるという視点を与えて、活動の動機づけとしていただけるとよいと考えます。

3. 期日 平成27年11月27日（金）

4. 日程

時 間	時 間	場 所	観 覧 者	備 考
～9:00			研修員到着	会議室を控室とする
9:00～9:15	15分	校長室・校舎	挨拶・見学	学校長・学級で対応
9:30～11:10	90分	体育館	歓迎式・全校交流	10分の休憩は含む
11:10～11:20	10分		休憩・移動	
11:20～12:15	45分	各学年教室	学級交流	
12:15～12:50	35分		交流学級で昼食	
13:05～13:25	20分	体育館	さよならセレモニー	児童は自由参加
13:30		学校出発	学校出発	児童は見送り

5. 内 容

(1)事前学習の例（時教・教科・内容は学級で調整）

①～4年生）
生活科または国語：研修員の出身国について学ぶ。

⑤6年生）
総合学習：学級に入る研修員の出身国について調査を調べておく。現地語での挨拶や国旗など。
学級交流でのアクティビティーを計画する。
外国語活動：挨拶と自分の名前を英語で紹介できるように練習する。
名前や好きなスポーツを書いた自己紹介名刺を作る。

⑥6年生）
総合学習：研修員の国について調べる。
時数に余裕があれば、班ごとに分野を決めて調べ進捗にまとめる。
学級交流でのアクティビティーを計画する。
外国語活動：英語での自己紹介を練習する。（名前、好きなものなど）

英語を使った名刺と名札を作る。
既習の文型を利用して、聞きたいことを英語の質問と定める。

(2)当日の流れ

時 間	内 容
9:00	学校到着
9:00～9:15	校長より挨拶、校内見学
9:30～10:15	歓迎式・全校交流（前半45分・後半45分） 伊原・進行：中島
2分	① 学校長挨拶
1分	② 歓迎の言葉（後期児童会長：未定）
2分	③ JICAの活動について（JICA職員より）
5分	④ 英語で大層ご紹介（5・6年生より）→プロジェクター、PC
35分	⑤ アイスタグタイム「研修員自己紹介タイム」
	・まず自己紹介を聞く。出身国名は書かないでもらう。
	・一つずつ挙がる国名を聞き、各研修員がどの国の人が確認する。
	・挙げられた国名の出身と思う研修員のまわりを集まり、ハイタッチする。
	・同じ流れで全員を紹介する。 【休憩10分】
10:25～11:10	⑥ 国の様子紹介
40分	・研修員より、出身国について簡単に紹介してもらう。（通知はJICA職員）
	→プロジェクター、スクリーン、PC
2分	⑦ 歓迎の歌（全校合唱）『あの春の空のように』『学園の歌』一斉指導必要
3分	※時間があれば最後に全校児童と記念撮影する。（撮影会費を大地さんに依頼）
	【休憩10分】
11:20～12:15	各学年・学級での交流（55分） ※内容は各学年に一任。決まり次第JICAに連絡。
学級交流(55分)	※例えば
	・児童が英語で自己紹介し、名刺を交換する。
	・学級で企画したアクティビティー（簡単なゲームなど）で交流する。
	・日本の手遊び歌（おつかみ、せつせつ等）を教える。
	・自分たちが調べた中で、研修員の出身国についてわからないことを聞く。…等々
	※学年の実態に応じて『ふれあい』が体験できれば十分です。
12:15～12:50	昼食
昼食	各学級で一緒に昼食。
	※宗教的な理由などで食べられない場合もありますが、教室で児童とともに食卓についてもらうようお願いします。
	※12:50～13:05は児童が清掃活動をし、研修員さんは休憩や見学など自由に過ごしてもらいます。
13:05～13:25	離れかよなセレモニー
13:05～13:25	※昨年の反省から、集まる児童で簡単なセレモニーを行って区切りとします。
13:25	高学年中心に外国語活動で取り組んだ英語の歌（多分 We are the world 等）を一緒に歌って最後に研修員さん代表から一言挨拶をもらって終了。
13:30	研修員出発
学校出発	児童は教室の窓などから見送ります。見送り後は通常の5校時授業に入ります。

JICA 研修員学校訪問実施計画（案）より、当日の流れ

Name: PRABHU SELVARAJ プラーブ・ラジ

Country: INDIA インド

Local language: TAMIL タミル

☆Please write down how do you say “Hello” and “Thank you”, how to count the numbers in your language!

Hello: VANAKAM バナカム

Thank you: NANDRI ナンドリー

1: ONNU オンヌ

2: PAPP RENBU パップレンブ

3: MOONJU ムーンジュ

4: NARALU ナールル

5: IYINDHU イインドゥ

6: AARU アール

7: RELU イェル

8: AETTU エートゥ

9: ONEBATHU ワンバトゥ

10: PATTU パトゥ

Thank you for your cooperation! A·RI·GA·TO!

事前調査用のシート



評価と課題

各学級での交流の内容は担任に一任したのだが、何をしてよいのかわからないと困惑する教員や、逆に当日の動きをシミュレーションして何から何まで万全に準備しようとする教員もいた。私自身は予定通りにはいかないハプニングも交流のうちだと考えていたが、こうした不安を抱く教員向けに「確認と提案」を用意した。内容は、JICA 研修員は諸外国の政府関係者や公務員であること、政権批判は控えること、基本的に英語が使えること、交流目的で来日しているわけではないのでコミュニケーションに長けた人ばかりではないことなどの注意点と、学級交流の取り組みの具体例である。また、「学年の実態に応じて触れ合いが体験できれば良い」「先生がつたない英語で何かを伝えようとする事、その姿を見せること自体が国際理解教育」と訴え、「どうにかかります」と書き添えた。

JICA 研修員学校訪問 学級交流について (確認と提案) 担当: 中島

1. 来訪の JICA 研修員について

- 各国の政府高官や上級公務員です。今回は教育公務員ですが、主に教員を指導する立場の方です。
- 一歩進歩した内容が紹介されています。担任は国権と歴史を事前確認しておいてください。特にアフガニスタンやミャンマー、ハイチについては国の様子を調べさせる過程で不用意に歴史を語らないよう指導が必要かもしれません。
- ほぼ英語を話しますが、必ずしも母国語ではありません。
- 「わかりやすい交流内容を考えてください。子どもたちだけでは教員も緊張にさらされず『安心が伝わる』ことを念頭に置いてください。どうにかかります。今回は比較的容易に歴史を語らないよう指導が必要かもしれません。
- 交流目的で来日しているわけではないので必ずしも明るい性格の方ばかりではありません。今回は教育関係者でみなさんとも交流がよい方ばかりです。ただ、海外では教育者の評価が高いので日本のようにオトモダチ先好感で接する子どもには難しい目をつけることがあります。敬意を忘れず接するように指導してください。
- HP <http://www.jica.go.jp/obshihiro> などを見て JICA の仕事内容や「研修員はなぜ日本に来ているのか」などについて調べ、子どもたちに話しておいていただけるとよいと思います。
- 「経済的に貧しい国を訪問させると教員にまで影響している人々もいる」と確認させるとともに敬意も持てるよう指導してください。

2. 学級交流について

- 学級交流は高学年 5 分、低学年 4 分を予定しています。以下の点については係より研修員に依頼済みです。以下の内容をふまえて学級の交流内容を決めてください。

【研修員に依頼していること】

- 全校交流で、それぞれの紹介を兼ねて出身国についてのクイズを出します。
- ①現地語で「こんにちは」「ありがとう」「1 から 10 までの数字の読み方」を事前に教えていただきます。
- ワークシートあり
- ②紹介した後、各研修員より出身国の紹介をしていただきます。
- 1人3分程度、クイズ形式は1問か2問。
- ③学級交流では設備の関係で必ずしも PC が使えない場合がありますが、実物投影機を各学級に設置しています。国の様子がわかる写真、パンフレット、現地通貨、工芸品などをテレビに映して見せることができますので、それらを持ってきてくださると幸いです。

→全体交流の中で『出身国あてゲーム』を企画しています。資料室の中で研修員の名前と出身国を紙一枚に書いておいてください。学級配属になる方の出身国については知らせていません。あいさつなどを事前学習させておくことと全体のクイズで盛り上げられるかもしれません。

- 研修員さんが用意してくれるアクティビティの内容を確認し、配置を考えました。別紙配置表も参照してください。

学年	研修員	氏名・出身国	性別	研修員からのアクティビティ内容
5-2	3-2	シヤキルさん	男	《高学年用》 パワーポイントで国の様子を紹介 24ページ程度 《低学年用》 パワーポイントと動画で国の様子を紹介 8ページ程度
		アフガニスタン		
5-1	2-2	ケンさん	男	《高学年用》 パワーポイントで国の様子を紹介(動画あり) 24ページ程度 《低学年用》 パワーポイントで国の様子を紹介
		ハイチ		
4	1-1	アラさん	女	《高学年用》 パワーポイントで国の様子紹介 19ページ程度 《低学年用》 モンゴル語の歌の紹介(動画あり)
		モンゴル		
6-1	3-1	サンダーさん	女	《高学年用》 パワーポイントで国の様子紹介 13ページ程度 《低学年用》 民族の歌や踊りの紹介(動画あり)
		ミャンマー		
6-2	2-1	ジョニカさん	男	《高学年用》 パワーポイントで現地料理調理の様子を紹介 10ページ程度 《低学年用》 パワーポイントと実物で手づくりの伝統的なお面を見せて民族の様子を紹介
		バブアニューギニア		
4	1-2	インガさん	女	《高学年用》 パワーポイントで民族の種類を紹介 10ページ程度 《低学年用》 簡単なゲームを紹介して一緒に
		ナミビア		

教員向けの資料「確認と提案」



ハイチ出身ケンさんとの交流のようす

ハイチ出身のケンさんと交流した5年1組の学級通信に掲載された児童の感想文の一部を抜粋する。

「国は違って、笑顔でいれば心が通じることがわかった」
「私たちの言葉を理解しようとしてくれてうれしかった」
「生きてくても生きられない人がいる」
「勉強できる日本の子どもは幸せ」
「ケンさんの言葉を聞いて将来人を助けたいと思った」
「ハイチやほかの国が平和であってほしい」

交流事業において、共通語である英語ではなく研修生の現地の言葉をあえて使ったのは、現地の言葉でのあいさつは、たとえつたなくても相手の心を開かせる効果があることを、私自身がヨハネスブルグ日本人学校（南アフリカ）赴任中に現地でも何度か経験していたからである。

異文化を知ったとき、自分たちの文化とはここが違うとか珍しい面白いという発見だけでとどまってしまうことが多い。しかし違いを知ることは目的ではなく、互いにわかりあうための入り口でしかない。その先には「こんなに違うけれども人間として大事にすることは同じ」という気づきがある。児童にはぜひそこまで到達してほしいし、そのための肌を触れ合う体験であり、その人の母語での交流である。交流のコツは、肌を触れ合うこと、その人の言語で話しかけること、一緒に体を動かすことだと考えている。

大樹小における JICA 交流事業は、大雪で開催が危ぶまれた年もあったが、在任中に 4 回実施できた。その後私が転任したため、現在は継続していない。

開催にあたっては様々な準備が必要で、時間的には、学級担任を持っていたら難しかったかもしれない。また、自分のやり方を押し通して、もし失敗したときに責任をとれるのかと、自問自答することもあった。

この実践について報告すると「(海外経験のない) 他の人にはできない」と言われることがある。誉め言葉とありがたく受け取っているが、反面、学校行事の実施の可否が、個人の能力や意欲に依存してよいわけではないとも思う。



実践に至った経緯と提言

2009 年度から勤務したヨハネスブルグ日本人学校にはトラブル防止の観点から「現地スタッフと親しくしてはいけない」などの不文律があった。それに違和感を持ち、積極的に彼らと触れ合った。まずは学校行事で日本人学校の子どもたちと一緒に歌を披露してもらって交流。それがきっかけになって、スラム街として知られていたソウェトにある教会のクワイア（合唱団）に家族で参加するようになった。このとき、人々が飛び込みの外国人である自分たちを、懐深く、自然に受け入れてくれたことが強く印象に残った。

クワイアの歌声に感動したことから、日本人学校の芸術鑑賞会に彼らを招いて演奏会を実施、最後は児童生徒も保護者も大合唱という大成功をおさめた。その後、現地理解の取り組みをさらに進め、現地孤児院との定期的な交流事業も実現することができた。

前例を破って積極的に活動した背景には、「せっかく海外に赴任したのだからここでしかできないことをしたい」「自分の子どもを含む子どもたちの前で、自分が信じていることを推し進める姿を見せたい」という強い思いがあった。また日本人学校の先生方が共感

してくれ、力を貸してくれたことが大きかった。

2012年の帰国後に着任したのは、学校力向上特別指定校の大樹町立大樹小学校だった。担任を持たない立場だったので、在外校から帰任した自分の役割は国際理解教育と考え、管理職の応援を得て交流事業の実現に注力した。

大樹町内に外国人はもともと少なく、いてもすでに長期間住んでいて日本になじんでいる人だった。国際理解教育だから、なるべく日本の事情に通じていない人、日本語もできない人、つまり自分たちを理解していない人と交流することに意味があると考えた。帯広市のJICAに研修員の学校訪問制度があることを知って、これを国際理解教育に活用しようと発案した。JICAへの申請では、南アフリカで現地に飛び込んで多くの友人を得た経験から学んだことをアピールした。

大樹小から転任した芽室南小では、現在小6の担任をしている。学級の子どもたちには、折に触れて自分がアフリカで見聞したことを話し、海外のニュースがあればそれを取り上げて「この国には先生の友達がいるんだ」などと話している。また、外国語ジャンケンや様々な国・民族の言葉でのあいさつなど、日常生活のなかに折に触れて「世界」を取り入れている。

数年前は人間関係のトラブルもあった学級だったが、昨年度から学級スローガン「今、きみから広がる世界平和」を掲げた。世界平和の第一歩は学級がわかり合うことで、隣の子を受け入れられなければ世界平和は実現しないと言い続けた結果、現在は男女問わずとも仲が良い学級になっている。

小学校最後となる発表会は、児童によるオリジナル劇だった。いじめのあるクラスの子どもたちが、「戦争反対＝非国民」と言われた戦争中の日本や、アイヌ民族と和人の融和に尽力した鈴木銃太郎の生きた開拓期の郷土、そしてネルソン・マンデラ大統領が憎しみを超えて国を建て直した30年前の南アフリカの様子に触れて、自分たちを見つめ直す。「わかりあう努力をすることで心が変わる」がテーマになっている。



オリジナル劇「World Peace, like a Rainbow」の1シーン

16人の児童が作ったシナリオは私の予想をはるかに超える深い仕上がりで、タイトルは「World Peace, like a Rainbow」。問い続けてきた「人間として何を大切にしなければいけないか」という本質を、子どもたちががっかり受け取ってくれた、差別や排除を目にしたときに自分事として捉えることができる視点を得てくれたと感じている。国際理解

相手の母語からはじめる、体温を感じる国際交流

は学級経営の根幹にもなりうる。在外経験を帰国後に活かすということは、こういう子どもたちを増やすための「何か」に携わることである。そういう意識を持てば、活かす場面はいくらでもあることを実感した。

しかし残念ながら、国際理解教育ができることは、「バスケットボールの指導ができる」、「楽器演奏が指導できる」などのような、教員として評価されるスキルにはなっていない。いつか国際理解教育が、教員の評価軸の一つになってほしいと考えている。また、国際理解教育についてもっと語り合える場があれば情報交換ができて良いと思うが、現状はなかなかその機会はない。

国際理解の第一歩は「自分から声をかけたら仲良くなれる」という可能性を信じること。このことを繰り返し、様々な局面で、直接的・間接的に様々な方法で伝えていくうちに、それはいつしか、子どもたちの生きる信念となっていくと思う。それを伝え続けることが、海外で得難い経験をした自分の責務だと考えている。

世界の問題解決と「未来のスキル」を考える

渡辺 登

現在の勤務校等
新潟県長岡市立才津小学校

在外での勤務校／帰国年月
ロンドン日本人学校／2013年帰国

ロンドン日本人学校勤務時にチャリティーやフェアトレードの取り組みに接したこと、JICA 教師海外研修でエルサルバドルの JICA 専門家の活動を知ったことから、国際理解教育とキャリア教育を組み合わせたプログラムを考案。国際的な社会問題を自分のこととして捉え、その解決のために自分に何ができるかを考え、そのために必要な未来のスキルに結び付ける。小6 社会科「国際貢献」の単元学習として毎年実施している。

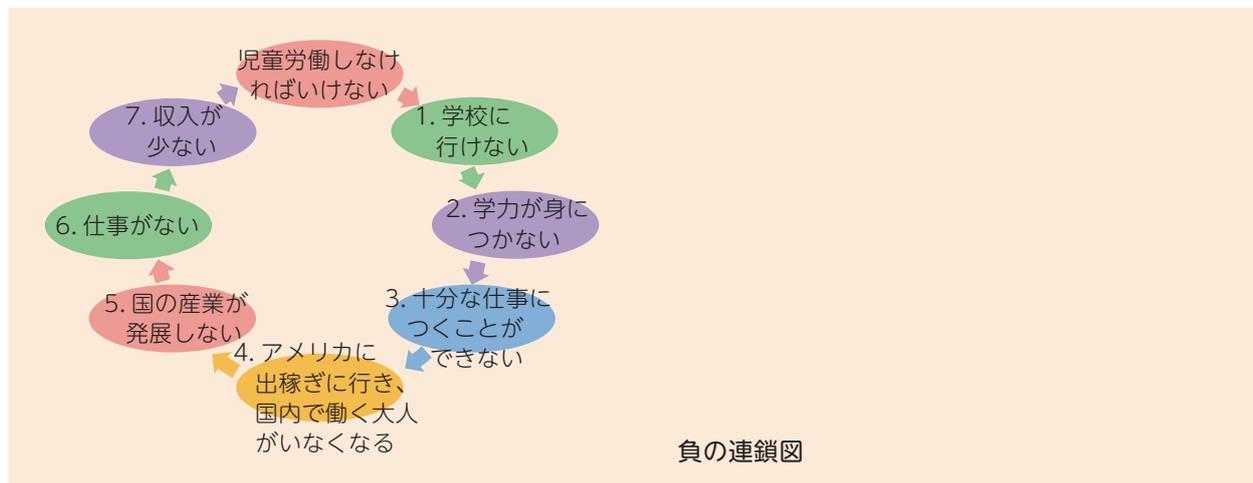
実践・活動の内容

小学6年生社会科「世界の人々とともに生きる」の単元の学習において、国際的な社会問題の解決に自分の「未来のスキル」を結び付けて考えることで、グローバル化する国際社会に生きる資質を養うことを目指した実践である。

まず、国際問題を自分ごととして捉えるために、ワークショップ「文字が読めないということ」を行った。ネパール語で「薬」「水」「毒」と書いた3本のペットボトルを用意して水を入れ、「薬」には少量の砂糖を、「毒」には少量の塩を混ぜた。その中から、児童に「薬」のボトルを選ばせた。児童たちは、文字が読めないということは、薬と毒の区別がつかないことを意味し、それはすなわち生命の危険があるのだと気づいた。

次に児童労働問題の題材を提示して説明した。文字が読めないことによる不利益や危険について、児童の意見を聞く。「文字が読めないと苦勞が大きい。学校は必要だ。」「どうして子どもが学校に行けないのか」との感想をもつ児童が多い。

ここで「児童労働 負の連鎖図」(図版)を示した。



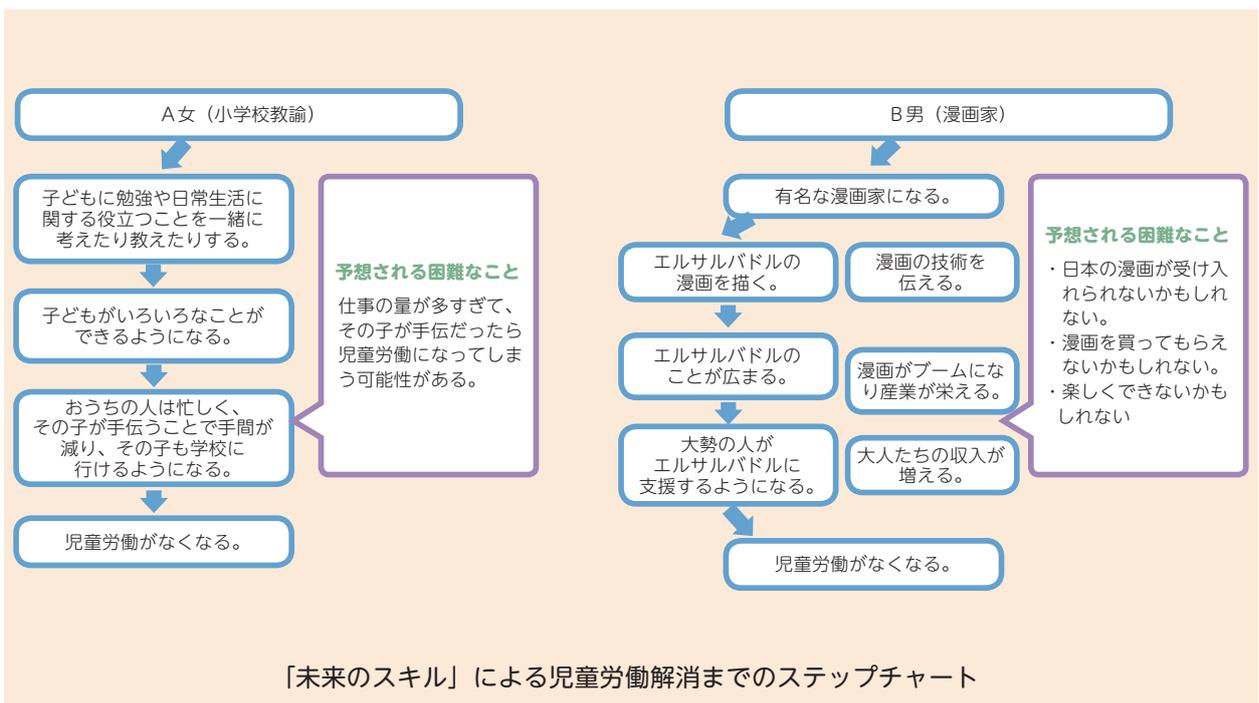
負の連鎖図

これは JICA エルサルバドル支部から提供を受けたもので、この連鎖のどこかを切ることができたら児童労働解消につながる。このことを児童に伝え、さらに、具体例としてエルサルバドルの JICA 専門家可児清隆さんによる貝類養殖技術の普及活動を教えた。可児氏は貝類養殖によって連鎖図の6と7を断ち切り、児童労働解消を目指している。



このほかに防災教育ボランティア石田夏樹さんの活動や ODA 資金援助による牛乳精製施設建設などの例を挙げ、児童労働解消までのステップチャートを児童が各自で作成して表現方法を習熟し、同時に開発途上国支援には様々な方法があることを学んだ。

最後に、自分が将来なりたい職業を選び、その仕事で社会問題をどのように解決するかを考えてステップチャートを描いた。自分の将来が世界の社会問題解決につながると考えることは、社会問題を自分ごととして捉えることになる。自分が国際社会で果たすべき役割について考えた。





評価と課題

本プログラムを発表した研究会では、国際理解教育とキャリア教育の連携を図った点で高い評価を受けた。小6の段階で、将来の自分の職業が国際援助に結び付くということに気づいた子どもたちの実際のキャリア選択につながる取り組みであったと感じている。

子どもたちの反応の具体例を紹介する。

児童Aは教員になる夢を持っており、文字のワークショップを通して教育の重要性を再認識したものの、当初は児童労働解消との直接の関連を見いだせずにいたが、実践後に次のように述べている。

「最初、私が選んだ小学校教育のスキルと「児童労働がなくなる」にあまり繋がりが分からなかったけれど、みんなで考えて、「お金を寄付する」「世界に広める」とか、新しいワードが出てきて、こうすれば児童労働がなくなるんだと納得することができた。」

漫画家になる夢を持つ児童Bは、最初は児童労働問題を他人事のように捉えていた。しかし社会問題を広報することも支援になること、広報活動で漫画のスキルが活かせることに気づき、「人の役に立ちたい」と、自分にできることを見出した。

児童Cは、普段は授業に特別な配慮を必要としており、勉強に取り組むことが苦手だったが、この授業中に図書館司書になりたいと言い出し、「良い本を子どもたちに紹介し、学校を好きになってもらう。そして、児童労働を解消させたい」という強い願いを持つに至った。Cが自分の意思を表すことは滅多にないことで、Cには良い学習の機会であった。教員としても、大きな手ごたえを感じた。

児童Dは、「有名なカメラマンになり、世界の状況を伝える」と発言。卒業後に学校を訪ねて、念願のカメラを手に入れて夢に向かって進んでいることを報告してくれた。

それまで自分だけのものだった将来の夢や計画に、「人の役に立つ」という視点が入ってくる。それによって児童は自分と社会との関係を強く意識することになるし、同時にそれは子どもの持つ夢を肯定することにもなる。特に、ステップチャートの使用は、未来のスキルと児童労働問題という社会問題を結びつけるにはとても有効だった。

いずれ活動内容を精査して教材化し、教員が手軽にこの実践に取り組めるように整備したいと考えている。



実践に至った経緯と提言

公立小の総合的な学習の時間でアマゾンに木を植える活動などに取り組んできたが、自分自身はずっと海外勤務の経験はなかった。いつか在外校勤務をしたい、国内校での自分の経験はきっと日本人学校の子どもの役に立つと思っていたが、念願かなって2010年にロンドン日本人学校に赴任。全校430名程度、小学生は1学年2クラスで、小1と小3を2回担任した。児童は多様で、日本語も英語も十分に育っていないダブルリミテッドの子どももいた。校務として、小3～中学生が使う学校発行の社会科副読本のリニューアルにかかわり、全職員で取材活動を分担して1年半がかりで取りまとめた。

趣味のトライアスロンなどを通して、現地のチャリティー活動の様子を目の当たりにし、文化としてチャリティー活動が根付いていることが分かった。チャリティーマラソンやチャリティートライアスロンなどのイベントに参加した際、人々がボランティアで大会を

運営したり、選手を応援したりする姿や、参加する際にチャリティー団体にお金を寄付するなどの姿を見て、ここでは支援したり支え合うことがごく当たり前ののだと感じた。日本では「良いものを安く」で生産者保護の概念がなかなか深まらず、チャリティーやフェアトレードが偽善と揶揄されがちだが、英国ではすでにチャリティーやフェアトレードは当然のことで、普通の暮らしにそれらが根付いていることが驚きだった。地球市民として活動することが当然であるという英国人の考え方に触れ、私も、個々の能力をグローバル社会のなかで生かすにはどうしたらよいのか、その態度を養うには何が必要か考えるようになった。

帰国後に着任した小学校では担任を離れて教務主任になり、小6の社会科を担当していた。学級担任ではないので、文房具や衣類を集めるなどの国際協力活動はしにくい。自分の担当時間内で何ができると考えて、「国際貢献」の単元学習に、国際理解教育とキャリア教育を組み合わせることを考えた。2014年にJICA東京主催の教師海外研修に参加し、中米エルサルバドルでJICA専門家として活躍する可児清隆さんの活躍を取材し、これが本実践のメイン教材のひとつになっている。

担任は持っていなかったが、毎年小6社会科を担当していたので本実践を繰り返すことができ、内容の改善にもつながった。現在は教頭になって小6社会科からも外れているが、毎年5時間はこの取り組みに充てている。

このほか、長岡市・ホノルル市姉妹都市交流プログラムの引率教員として、市内の中学生を連れてホノルルを訪問している。真珠湾攻撃時の連合艦隊司令長官山本五十六は長岡の出身であり、長岡市は米軍の空襲被害を受けているので、両者の間には感情のわだかまりがある。しかしそれを乗り越えようと、2014年頃から花火の交流などがはじまっていて、人々の平和に対する思いが結実しつつある。真珠湾のミュージアムには山本五十六の展示があり、彼が日米開戦に反対していたことも説明されていた。

この姉妹都市交流プログラムには、小学校時代に「未来のスキル」授業を受けていた児童のふたりが中学生になって参加した。航空機製造の技術者になるという夢を持つ彼らは実際にホノルルを訪れ、平和大使としての学びを深めてきたが、私とその引率役をつとめられたことは嬉しかった。

この姉妹都市提携を活かして、平和をテーマにした学習プログラムをつくりたいと考えている。

学校外では、新潟県国際理解教育研究会に所属して、国際理解教育に携わってきた。現在は研修部長とNPO RING（新潟県国際教育研究会）の企画委員をつとめている。コロナ禍にあっても、ロシア、韓国、ベトナムの講師を招き、3度の国際理解教育セミナーをオンラインで開催した。また、秋季研修会は、在外教育施設に勤務中の教員も参加できるよう、初めて完全オンラインとして開催した。

帰国教員は、海外経験を活かそうと意欲を持つ人と、海外経験をできれば隠しておきたいという人に二分される。「外国帰り」として反発を受けることもある。それらが、帰国教員が埋没してしまう理由になっていると思う。

富山市では、帰任した教員を市のホームページで公開し、現場の教員から直接問い合わせや講演依頼ができるシステムがあるそうだ。自分から「やりますよ」「教えますよ」「知っていますよ」とは言いにくくても、こうして帰国教員に公的に役割を与えれば活用の道は

開ける。このシステムをぜひ新潟にも導入したいと考えている。

ロンドン日本人学校勤務は、私の学びの場を広げてくれた。これから派遣される教員の志望動機はそれぞれ違うと思うが、プロとして頑張ろうという心構えを持ってやってほしい。そうすれば得るものはとても大きいと思う。

ロンドンの経験は、その後の JICA 教師海外研修を経て授業実践につながった。しかし、海外経験だけで、学習をつくることはできない。私が今、海外経験を活かしているのは、経験の上に学びを続けてきたからではないかと思う。

日本人は、今、内向きになっていると言われている。しかし、世界は知らないとわからない。教え子たちには「さまざまな機会を生かし、一度は海外へ行ってみたい」と話している。いつかは飛び出してほしいと願いながら、日々、小学生に種まきをしている。

「谷根千おもてなし課」が 地域の課題に取り組む

多田 亮介

現在の勤務校等
東京都文京区立千駄木小学校

在外での勤務校／帰国年月
キナバル日本人学校／2014年帰国

日本に来ている外国人の目線で地域の課題を発見するとともに、その解決のために自分たちができることを考えて実践する、対話型授業とグループワークをベースにした国際理解教育のプログラム。「世界を知ろう」、「世界とつながろう」、「世界とのかけ橋になろう」の3段階から成り、地域の人々の協力を得て実施されている。



実践・活動の内容

「こちら谷根千おもてなし課」は、文京区立千駄木小学校小5の1年間を通じてのカリキュラムである。

1学期は、自分の好きな国をひとつ選んで、「ガイドブックに載っていない、とっておき情報」として発表した。調べる国は自由に選んだ。アメリカや中国などにもっと偏るかと思っていたが、海外在住や旅行経験のある児童も多く、サッカー好きな児童が南米の国をあげるなど、子どもたちにとっての外国は多彩だった。

この調べ学習と発表・対話を通じて、児童は世界と日本が違うことを実感する。導入には、私がマレーシア時代に撮影した移動遊園地の小さい観覧車の写真などを見せて、現地で見聞したことやその時に感じたことを話している。

2学期は、外国人と自分たちとの習慣や文化の違いを調べて発表した。日本に来た外国人がどんなことに困っているか、さらにその困りごとを解決するためには何をしたらよいかを考えた。たとえば宗教上の理由でブタを食べられない人に、日本語で「トンカツ」と書いてもわからない。ではporkと書いておけばよいのか？ それでは英語ができない人にはわからない？ ならばブタのイラストはどうだろう？ などと対話が進んだ。そして、実際に外国人を迎えている現場ではどのような工夫をしているのかを、子どもたちがグループを組んで、谷根千の街に出て商店や飲食店などに取材してまわり、その結果も発表した。

3学期は、取材したことをもとに、街の人が外国人とかかわる中で「困っていること」に注目した。それは同時に、文化・風習が違う外国人が認識・理解できずに当惑することでもある。そこで、この双方の困りごとに対して自分たちに何ができるかを考え、それを実際に形にしていた。過去に実現したものは、英語のメニュー、地図、トイレの場所がわかる地図、ポイ捨て禁止のポスター、寺院での参拝作法の図解・多言語ポスターなどである。それらの成果品の一部は、商店街の商店や寺院などに置いてもらった。



児童による成果品 お寺の作法

本プロジェクトは、地域の力を借りていることが大きな特徴である。地元の商店街などの人達が、子どもたちの取材や成果品の活用に協力してくれた。

なかでも中核的な存在になっているのは、谷中で澤の屋旅館を経営する澤功さんで、毎年、三学期のはじめにゲストティーチャーとして招いている。ちょうど困りごとを抽出して解決策の検討と制作を始める時期にあたる。

澤の屋旅館は家族経営の純日本式の旅館だが、海外サイトでは有名な存在である。和室に布団という外国人がイメージする「日本」をあえて残し、ロングステイ客に必要な洗濯機を置くなどの配慮をして、片言の英語とイラストなどを駆使して毎年多くの外国人を受け入れている。子どもたちは、外国人対応は「何でも英語にすればよい」という発想になりがちだが、澤さんの実体験に基づく話を聞くと、言葉ができるだけですべてがうまくいくわけではないことに気づく。また、英語ができなくてもコミュニケーションがとれることを知る。このことで、視点を転換し、視野を広げることは、その後の作品づくりの着眼点にも影響する。また、澤の屋旅館には成果品を置いてもらうので、子どもたちは、自分たちがつくったものが実際に外国人の役に立つかもしれないという期待をもつことができる。

プログラム全体は多様な視点を共有しアドバイスし合うというグループワークを基本にしており、対話なしには進んでいかないような設計になっている。

段階	主な学習活動	目標上の学習成果
第1次	1 <導入> 「今年に東京でオリンピックが行われる」これからの学習の目的や対象を知り、これからどんな準備が必要であるか話し合う。	●話し合いの場について知るこの重要性に気づくことができる。
第2次	2 <課題設定> 自分の関心している点について、知っていることを発表し合い、調べてみたい点を決める。	○グループ作りを行う。 ○自分の関心している点や地域について、理由を明確に発表し合う。(他者との対話)
第3次	3 <情報収集> ○自分や地域のグループごとに調べ学習を行う。 ○「ゲストティーチャー」の動画、インターネット、本等を使って調べ学習を行う。	●必要な情報を取り出し、整理している。 ○外国と日本の違いを知り、関心を高める。 ○話し合いをまとめるリポートをつくる。
第4次	4 <発表・対話> ○自分の発表の仕方、まとめるのを考える。	●わかりやすいように発表の仕方を工夫している。
第5次	5 <まとめ・発表> ○グループごとに発表をつくり、プレゼンテーション形式で発表する。 ○他のクラスと発表の交流がある。	○自分の発表の仕方について話し合っている。(他者との対話) ●わかりやすくまとめている。 ○発表の場としての話し合いや発表を、自分にもかかろうとすることができるようになる。
第6次	6 <振り返り> 「自分の発表の仕方、その場での生活の振り返り」を調べ、ワークシートにまとめる。	○1日振り返りを行い、振り返りシートにまとめる。
第7次	7 <導入> ○外国の人々と仲良くするためのヒントを考える。 ○実際に調べた小学生の生活について、話し合いをし、発表を交わす。	●多様な意見があることに気づく。 ○自分の発表の仕方について話し合うことができる。 ○自分の発表の仕方について話し合っている。(他者との対話) ●必要な情報を取り出し、整理している。 ○話し合いをまとめるリポートをつくる。
第8次	8 <課題設定> ○自分や地域のグループごとに調べ学習を行う。 ○「ゲストティーチャー」の動画、インターネット、本等を使って調べ学習を行う。	●必要な情報を取り出し、整理している。 ○外国と日本の違いを知り、関心を高める。 ○話し合いをまとめるリポートをつくる。
第9次	9 <発表・対話> ○自分の発表の仕方、まとめるのを考える。	●わかりやすいように発表の仕方を工夫している。
第10次	10 <まとめ・発表> ○グループごとに発表をつくり、プレゼンテーション形式で発表する。 ○他のクラスと発表の交流がある。	○自分の発表の仕方について話し合っている。(他者との対話) ●わかりやすくまとめている。 ○発表の場としての話し合いや発表を、自分にもかかろうとすることができるようになる。
第11次	11 <振り返り> 「自分の発表の仕方、その場での生活の振り返り」を調べ、ワークシートにまとめる。	○1日振り返りを行い、振り返りシートにまとめる。

第12次	12 <導入・対話・まとめ・発表> ○自分の発表の仕方、その場での生活の振り返りについて話し合っている。 ○話し合いをまとめるリポートをつくる。	○自分の発表の仕方について話し合っている。(他者との対話) ●必要な情報を取り出し、整理している。 ○話し合いをまとめるリポートをつくる。
第13次	13 <課題設定> 自分の関心している点について、知っていることを発表し合い、調べてみたい点を決める。	○グループ作りを行う。 ○自分の関心している点や地域について、理由を明確に発表し合う。(他者との対話)
第14次	14 <情報収集> ○自分や地域のグループごとに調べ学習を行う。 ○「ゲストティーチャー」の動画、インターネット、本等を使って調べ学習を行う。	●必要な情報を取り出し、整理している。 ○外国と日本の違いを知り、関心を高める。 ○話し合いをまとめるリポートをつくる。
第15次	15 <発表・対話> ○自分の発表の仕方、まとめるのを考える。	●わかりやすいように発表の仕方を工夫している。
第16次	16 <まとめ・発表> ○グループごとに発表をつくり、プレゼンテーション形式で発表する。 ○他のクラスと発表の交流がある。	○自分の発表の仕方について話し合っている。(他者との対話) ●わかりやすくまとめている。 ○発表の場としての話し合いや発表を、自分にもかかろうとすることができるようになる。
第17次	17 <振り返り> 「自分の発表の仕方、その場での生活の振り返り」を調べ、ワークシートにまとめる。	○1日振り返りを行い、振り返りシートにまとめる。
第18次	18 <導入> 「今年に東京でオリンピックが行われる」これからの学習の目的や対象を知り、これからどんな準備が必要であるか話し合う。	●話し合いの場について知るこの重要性に気づくことができる。
第19次	19 <課題設定> 自分の関心している点について、知っていることを発表し合い、調べてみたい点を決める。	○グループ作りを行う。 ○自分の関心している点や地域について、理由を明確に発表し合う。(他者との対話)
第20次	20 <情報収集> ○自分や地域のグループごとに調べ学習を行う。 ○「ゲストティーチャー」の動画、インターネット、本等を使って調べ学習を行う。	●必要な情報を取り出し、整理している。 ○外国と日本の違いを知り、関心を高める。 ○話し合いをまとめるリポートをつくる。
第21次	21 <発表・対話> ○自分の発表の仕方、まとめるのを考える。	●わかりやすいように発表の仕方を工夫している。
第22次	22 <まとめ・発表> ○グループごとに発表をつくり、プレゼンテーション形式で発表する。 ○他のクラスと発表の交流がある。	○自分の発表の仕方について話し合っている。(他者との対話) ●わかりやすくまとめている。 ○発表の場としての話し合いや発表を、自分にもかかろうとすることができるようになる。
第23次	23 <振り返り> 「自分の発表の仕方、その場での生活の振り返り」を調べ、ワークシートにまとめる。	○1日振り返りを行い、振り返りシートにまとめる。
第24次	24 <導入・対話・まとめ・発表> ○自分の発表の仕方、その場での生活の振り返りについて話し合っている。 ○話し合いをまとめるリポートをつくる。	○自分の発表の仕方について話し合っている。(他者との対話) ●必要な情報を取り出し、整理している。 ○話し合いをまとめるリポートをつくる。

年間のカリキュラム



評価と課題

プログラムの初年度は自主発表を行う年だったこともあり、文京区の国際交流フェスタにも出展した。子どもたちの作品を展示し、希望者が参加した。2年目以降はフェスタ出展していないが、プログラムは以来8年間続き、現在も継続中である。子どもたちが調べる「とっておき情報」や、取材で発見してくる街の課題、そして課題解決のために制作するものは毎年違う。ただしマイナーチェンジはしており、たとえば、現在は2学期のテーマを「外国の小学生の生活を学ぼう」に変えている。

毎年新しい「何か」の発見があるので、停滞は今のところ感じていない。教員にとっても楽しく、やりがいのあるプログラムである。教員の予想を超えた成果もあった。トイレを貸してくれる店などをマッピングした「トイレマップ」、観光客が行くポイントに絞りこんで、そこへの行き方にフォーカスしたマップなどである。トイレマップは、取材で外国人観光客のトイレトラブルについて聞いた子どもたちが解決策として考えたもので、地元の子どもたちならではの着想だと感じた。

2020年は、新型コロナ禍で大きな軌道修正を余儀なくされた。谷根千の街から外国人観光客の姿が消え、感染防止の観点からもプログラムの大きな山場でもある取材活動を自粛せざるを得なかった。一方でタブレットが一人一人に配布されたことで、調べ学習が効率的に進むようになってきている。澤さんによるゲストティーチャーは継続しているので、街の人の取材ができない分をそこで補っており、澤さんの存在がますます重要性を増している。また、子どもたちのほうから、「タブレットを使って澤の屋さんをアピールできないだろうか」などの新しいアイデアも出てきている。

このほか、社会情勢や学校の方針に左右されることはある。子どもたちの取材先は一部学区や行政区をまたぐところにもあり、そこに、放課後子どもたちだけで取材に出かけるということが問題視されたこともあった。

現在までのところ、このプログラムを作成した私自身がほぼ毎年実践しており、学校内にも「5年生になったら、世界のことをやる」という認識ができています。また、継続していることで、以前の年度との比較もでき、改良につながっている。

しかし将来的な継続を考えた場合、プログラムのコンセプトは残しつつ縮小していく必要があるかもしれない。大きな流れはそのままに個別のプログラムを別のものに変えてもよいし、むしろそのように積極的にアップデートされていくべきだと思っている。キーパーソンの澤さんも高齢なので、いつまで協力をお願いできるかはわからない状況である。新たなゲストティーチャーも模索していく時期にきている。



実践に至った経緯と提言

子ども時代にブラジルのベロ・オリゾンテ日本人学校（休校・平成14年3月文科省指定解除・認定取消）に在籍した経験があり、教師になった時から、いつかは在外校で教えたいと考えていた。東京の公立小学校勤務を経て、2011年東日本大震災直後にマレーシアのコタキナバル日本人学校へ赴任。全校生徒は15～20名ほどで、教員も派遣・現地採用合わせて数名という小規模校だった。在任中には、小4・6、小4・5、小5・6を担当した。複式学級の指導をするのは初めての経験で、2クラス分の授業準備に追われ、

複式授業の工夫を重ねていった。

コタキナバルの治安は良かったものの日本人コミュニティは小さく、食材はじめ日本のものは手に入らなかった。生活習慣の違いに自分を順応させていくのが大変だった。学校でも日常生活でも、あらゆる意味で、日本では経験できないことばかりだった。

2014年の帰国後は、文京区立千駄木小学校で小5の担任になった。区の指定校になっており、国際理解教育のプログラムを作成することが前年度にすでに決定していた。

着任早々に内容の検討をはじめた。日本ユネスコ協会や JICA にも内容について相談し、机上だけの実践に終わるのではなく、子どもたちが実際に体を動かしてできること、成果品をつくるまでやらせたいと考えた。

当時の小5は4学級あり、教諭のひとは海外での交流活動の豊富な経験を有していた。ほかの二人の担任は若手だったので、おもに彼女と私でプロジェクトを牽引した。

その前年の2013年に、2020年の東京オリンピック開催が決定していた。担任している子どもたちが高校生になる頃には、地元開催のオリンピックに高校生ボランティアとしてかかわることができるかもしれない。あるいは、オリンピックにやってきた外国人が日本で困っていた時に、手を差し伸べることができるかもしれないと思った。

千駄木小学校があるあたりは谷根千と呼ばれ、外国人観光客にも人気の高いエリアである。ここには、オリンピック開催を待つまでもなく、すでに多くの外国人が訪問しており、商店や旅館は外国語対応などの様々な工夫を実施している。また、それゆえに外国人由来の困りごとに悩まされているという側面もある。これらのことを子どもたちが調べることができれば、国際理解教育の格好の題材になると考えた。

千駄木小は、子どもたちの学力が高く、海外生活や旅行経験のある児童も多く、実践に取り組みやすい環境だった。生活指導に時間をとられる学校では、国際理解教育にじっくりと取り組む余裕がない場合もあるだろう。しかし、多文化共生をコンセプトとするこのプログラムは、困難な学校でこそ実施する意味があると思う。

プログラム実施の負担は小さくはないので、取り組みに消極的な教員もいる。しかし、実際に授業が動きだして子どもたちの反応が見えてくると、教員の評価や姿勢が変わってくることが多い。年度初めの導入授業を自分で全クラス分引き受けて実施し、軌道に乗せてから各クラス担任に任せる方法をとったこともある。

このプログラムの開発にあたっては、マレーシアでの体験が大きく影響していると思う。言葉の通じない外国で暮らした私には、逆に日本に来ている外国人が何に困っているかを実感として理解できる。その意味では自分のなかで日本人学校勤務の経験はずっと生きていくし、これからも活かしていきたいと思っている。

在外校に勤務する教員は、現地で気づいたことをできるだけたくさんメモしてきてほしい。そのメモは「とっておき情報」になる。そういう視点を持ち寄ると面白いことが見えてきて、国際理解教育の素材にもなる。すると、国際理解教育に取り組む教員自身も楽しくなってくる。

国際理解教育は、単体では取り入れにくいという問題もある。しかし、たとえば外部の人をゲストティーチャーに迎える講座を核にして、その前後の授業に調べ学習や事後学習などを組み合わせるとか、キャリア教育などと「抱き合わせ」にする方法もある。その時に生きてくるのも、海外で培った人脈である。



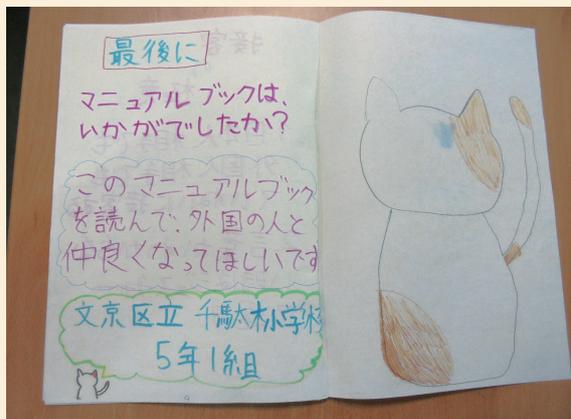
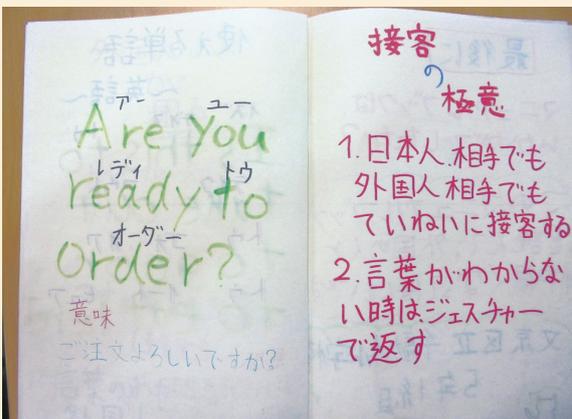
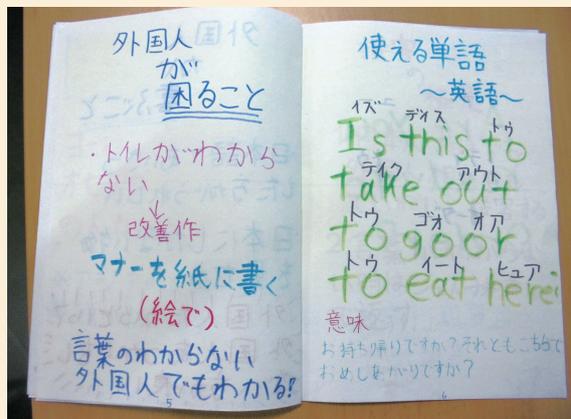
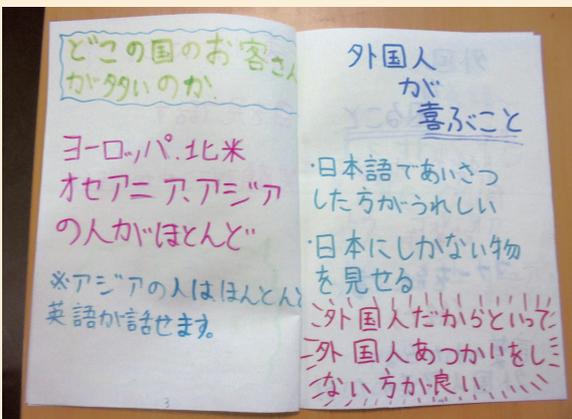
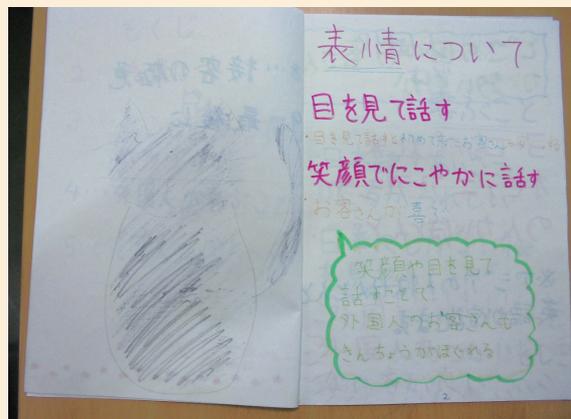
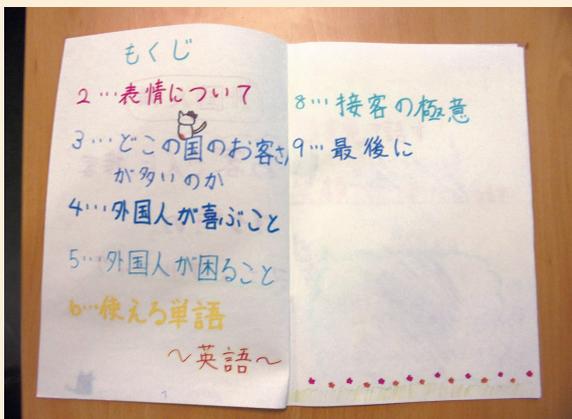
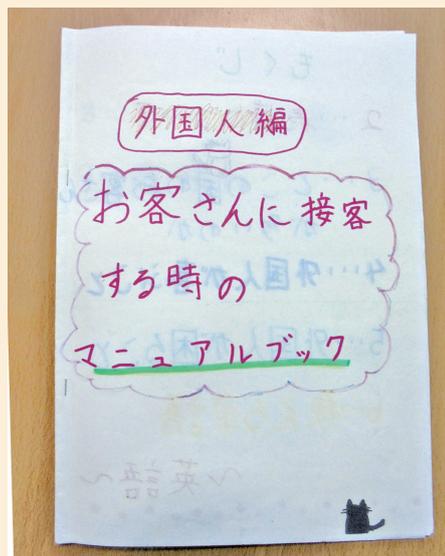
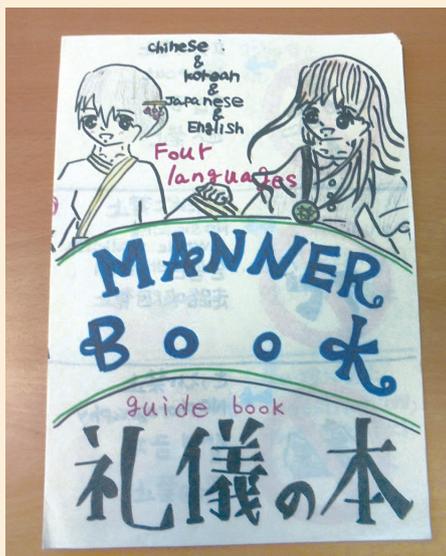
澤さん講演会



地図の作成



国際交流フェスタにて



児童による成果品 マナーブック

社会にアクセスする教育を、 人とのつながりから生み出す

早崎 史朗

現在の勤務校等
岐阜県大垣市立星和中学校

在外での勤務校／帰国年月
パリ日本人学校／2018年帰国

中学美術科において、フェンシングなどのスポーツ競技のピクトグラム制作活動を実施。パリ日本人学校時代に培っていた人脈と連携し、学校内での授業実践にとどまらず、成果物を実際に国際スポーツ大会の場で発信することを通じて、社会へのアクセスを目指した。



実践・活動の内容

大垣市立星和中学校2年生の美術科で『世界に発信！～オリンピック競技のピクトグラムづくり～』と題して制作活動に取り組んだ。制作するピクトグラムのテーマは、フェンシングを含むオリンピック種目3種類の競技である。リサーチや作品制作という授業内の取り組みを超えて、「自分の作品をオリンピック会場に展示しよう！」をキーワードに、最終目標は2020年オリンピック・パラリンピック会場での作品展示をすることに設定した。

ピクトグラム1年目の作品づくりに関わって



生徒の制作の様子と生徒作品

ピクトグラム1年目の作品づくりに関わって

2018年10月 日本F協会会長、国際F連盟副会長太田さんの来校
全校での講話と美術授業の参観



ピクトグラム1年目の作品づくりに関わって



1年目のピクトグラム制作

パリ日本人学校時代に、ロンドンオリンピック銀メダリスト太田雄貴さん（元日本フェンシング協会会長・国際フェンシング協会副会長）の訪問を受けたことから、フェンシングの世界とつながりができていた。それ以来付き合いが続いていた太田さんや、当時の東

京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会フェンシング担当のスポーツマネージャー加藤裕子さんに授業への協力を依頼。組織委員会スポーツ局のスタッフからは展示に関するアドバイスや支援をもらい、日本フェンシング協会からもサポートを受けた。太田さん自身も星和中を訪問して美術の授業を参観し、生徒たちが制作しているピクトグラムを実際に手に取って交流した。こうした人々の尽力が実り、2019年12月の高円宮杯(日本で実施されるフェンシングの世界カップ)では、生徒のピクトグラムが会場で展示された。自分たちの作品が世界中からやってきた選手や関係者の目に触れたことは、生徒たちにとって大きな励みとなった。

取り組みの2年目(2019年)は、テーマをフェンシングを含むオリ・パラ種目3種類に広げた。6月に、パリ時代の友人から紹介されたパラ卓球アスリートの渡邊剛さんの来校・講話を通してパラスポーツの学びを進め、7月に岐阜で実施されたジャパンパラ(W杯)では、多くの関係者に作品を見せて、評価してもらうことができた。なかでも、日本パラ陸上競技連盟の増田明美会長から、陸上とスポーツと芸術は同じ美しいものでとても励みになる、パラスポーツの会場での展示は嬉しいという好意的な反応を得たことには、大きな手ごたえを感じた。パラリンピック会場での展示実現に、ぐっと近づいた気がした。



2年目のピクトグラム制作

3年目(2020年)は、新型コロナウイルス感染拡大を受けて、ピクトグラムのテーマを「ストップ・コロナ」に変更して実施した。



3年目のピクトグラム制作

● 動画制作

本実践では、作品制作だけではなく社会とのつながりを意識している。実践を学校の中だけで終わらせず、社会にアクセスしてよりよい社会づくりを目指していくことは、授業のカリキュラムマネジメントの極みではないかと考えていた。

そのために、広く社会にアピールする動画をつくることにした。ピクトグラムプロジェクトの1年目に動画制作を発案し、太田さんから岐阜にある朝日大学のフェンシング部を紹介してもらった。地元ケーブルテレビ局の取材で知り合ったアーティスト動画やプロモーションビデオを手掛ける若いディレクターとともに、2年目に動画制作に向けて動きだした。

生徒たちが制作したピクトグラムを、制作者の名前入りで、フェンシングの選手の動きに重ねて映像化した。生徒役にはプロの役者を起用した。英語だけではなくフランス語も添えた。動画を素人の手作りではなく「プロ仕様」にすることにこだわったのは、将来、競技会場などの巨大プロジェクトで上映される可能性を考えてのことだった。どんな会場でも映えるクオリティのものを作りたいと考えた。

生徒たちは、最初は「オリ・パラ会場で展示なんて無理」「上映なんてできるわけない」と消極的な反応だった。だからこそ、日本の一地方からでも世界にアクセスできる方法があるということを示したいと考えた。こんな田舎からでも発信できる、ワクワクすることができる、君たちは世界への切符を持っていると伝えたいと思った。



動画 FENCINGPICTOGRAM “Product & Making”



評価と課題

この実践は、社会とのつながりを重視している。それによって、生徒たちは美術が社会とかかわることであり、ひいては、自分たちにもこんなことができる、さらに世界に発信していけるということを実感できる。しかし、それにはどうしても時間がかかり、年度内に完結することができないといった学校の美術教育に落とし込む難しさがあり、生徒たちへのフィードバックも課題だと思っている。

2020年東京オリンピック・パラリンピックは、新型コロナ禍で延期となった。生徒も私もそれを目標に取り組み、関係者も尽力してくれてようやくそれが実を結びかけていたところで、これから全国の教員にも声をかけて活動を広め、各地の子どもたちにも参加してもらってともに成功体験を味わおうと考えていた矢先のことだった。まるで最後で足をすくわれたような衝撃だった。それまでに各方面と協働しながら進めてきたプロジェクトはすべてストップし、2021年の延期開催では様々なことが白紙に戻り、結局子どもたち

の作品が会場を飾ることはできなかった。

動画は狙い通りのスタイリッシュな仕上がりとなり、とても好評だった。しかし、2021年のオリンピック・パラリンピック会場で流れることはなかった。日本フェンシング協会は趣旨に賛同して実現に向けて動いてくれたが、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会は、他競技や他団体との公平性の観点から、一団体の作品をオリンピック会場で流すことはできないという判断をした。

しかし、この動画放映についての案件が、多くの人々の応援のもとでIOCに届き、検討のためのテーブルに載ったという事実は大きい。目標には到達できなかったが、そこまでの過程に価値があった、美術が社会にかかわることの一つの形を示すことができたと考えている。



実践に至った経緯と提言

在外校勤務経験を持つ先輩教員の見識の広さに触れて感銘を受けたことがあり、自分も海外で教えることが人生にプラスになるのではないかと考えていた。念願かなって2015年にパリ日本人学校に赴任した。

世界から日本を見て、様々な人にふれるのは貴重な経験だった。またルーブル美術館やオルセー美術館など、フランスの文化資源を題材にした授業をつくった。在住日本人との交流もあり、特にその後の人脈を大きく広げてくれる人物と巡り合ったことはとても幸運だった。



パリ日本人学校での取り組み 美術館研修、交流学習、体力向上ダンス

2017年12月頃、パリ在住の旧知の日本人から、太田雄貴さんがパリで開催されるワールドカップ前に日本人学校訪問の希望を持っているという話を持ち掛けられた。同じ頃に文部科学省を通じてオリンピック・パラリンピックのマスコットキャラクター選定の授業の取材申し込みがあった。太田さんは東京オリ・パラ誘致の立役者の一人でもある。そこで、これらを合わせて授業を作ることを考えた。

2018年1月19日に来校した太田さんには、全校児童生徒にフェンシングに関するレクチャーとオリパラマスケット選考会、中学部に向けてキャリア教育として進路講話をしていただいた。さらに翌々日、日本人学校児童生徒と保護者有志の約50名でW杯会場に出向き、大きな声援を送った。このことが、その後の太田さんと私のつながりをさらに深くし、星和中の実践へとつながっていった。



パリ日本人学校での
オリ・パラマスケットキャラクター選出と
太田さんとの交流

帰国後は大垣市立星和中に着任。すぐに美術科でピクトグラムの取り組みをはじめた。

2018年夏に太田さんから連絡があり、フェンシングの大会に向けて応援エールを作っ
てほしいと依頼を受けた。パリ日本人学校の派遣教員仲間呼びかけて「創造的破壊
Creative Destruction」をテーマに新しい応援をつくりあげ、12月9日にフェンシ
ング全日本選手権大会で披露した。この活動は創作活動としてもとても有意義なものだと実
感し、今後さらに活動していきたいと考えて、日本に在住しているパリ日本人学校の職員、
児童生徒や保護者に対して、「間もなくやってくるオリンピックを見据え、ワクワクする
未来を一緒に作りましょう」と呼びかけて「同創会」を結成した。

同創会の活動はその後も続き、2019年の高円宮杯フェンシングワールドカップ東京大
会、アジアフェンシング選手権大会、第72回フェンシング全日本選手権、さらにその次
の高円宮杯と、実績を積み重ねている。これも、パリ日本人学校でのつながりから生まれ
た大きな財産である。

現在の教育現場は働きづらく、面白くないことも多い。校則問題や保護者対応などに翻
弄され、せっかく教員になった若い人が「先生ってこんな仕事？」と落胆してしまいかね
ないと危惧することもある。しかしそれを乗り越えて、教育を明るく楽しくやっていき
たい。働き方改革が叫ばれる昨今だが、勤務時間短縮などの物理的な形にとらわれるの
ではなく、仕事の本質を見つめて取り組み方そのものを見直していく必要がある。それが授業
現場を離れ、プレイングマネージャー的な立場になった現在私がやるべきことだと考えて
いる。

海外の教育施設で働こうと志願し、行動力でその夢を叶えた派遣教員は、国外から日本
の教育を見て考えるという得難い経験を積み、また世界で活躍する日本人と出会い、学
ぶことができる。これは、大きな強みである。

帰国後の私は、つねにこの経験を生かそうとする姿勢を持ち、何事も必ずできると信
じることから始めた。その結果、多くの得難い友人知人の協力を得て力を発揮でき、様
々な実践ができた。そして、学校の枠を超えて、社会とのかかわりを持つことができた。
生徒たちに、美術は生きること、そして社会の役にたっていることをわかってもらいた
いという願いに、少し近づくことができた。

人とのつながりをつなぎつなげるのが私のモットーで、まず自分自身がそれを教育活動に活かそうと思ってきた。今後は、私をハブにしてみんながどんどんつながってほしい、そのためのボンドであり糊になりたいと思っている。

自分のやり方に固執している 40 代 50 代の教員に無理強いしようとは思わないが、若い人ややる気のある人は様々な可能性や選択肢を見つけてほしいし、その手伝いをしたい。そして、一緒に明るい日本、ワクワクする未来をつくっていきたい。私が必要とあらば、いつでも声をかけてほしいと願っている。

海を越えて「桜」がつなぐ日本の心

大前 忍

現在の勤務校等
岐阜県大垣市立北小学校
在外での勤務校／帰国年月
プラハ日本人学校／2019年帰国

校内に52本の自慢の桜がある小学校の児童と海外の日本人学校・補習授業校の児童が、桜をテーマに相互交流した。外国にも自分と同じ日本人の小学生がいると知って海外への興味が生まれた児童の素朴な疑問が、世界をつなぐ交流事業に発展した。



実践・活動の内容

校内に52本の桜の木がある小学校に帰任して小3を担当した。小3は地域の桜について学び、「桜守活動」として水やりなどの管理をする学年で、その活動中に児童から「日本人学校にも桜あった？」と聞かれた。赴任していたプラハ日本人学校にはさくらんぼのなる桜の木がありみんなで食べていた、学校に隣接しているアパートの庭にはとてもきれいな八重桜があって記念撮影をした、などの話をしたら、子どもたちが「私たちの桜のことを外国に紹介したい」と言い出した。

子どもたちは英語でやりとりするのでは自分の意思が伝わらない、自分たちの言葉でしっかり伝えたいという希望を持っていた。「先生は外国で、日本語で教えていたんでしょ、外国にも日本の子どもがいるんだよね」と日本人学校の子どもに興味を持ったので、日本人学校との交流を発案した。

まず前任校のプラハ日本人学校に打診したが、それだけではなくもっとたくさんの学校にも知らせたいと考えたので、各国の日本人学校のホームページや個人的な伝手をたどってメールを送った。交流相手を探す際には学校の後押しが必要だったので、校長からの手紙を添えるようにした。

返事があったのは8校、その後子どもたち同士の相互交流まで発展したのは、プラハ日本人学校（チェコ）、バルセロナ日本人学校（スペイン）、ハンブルグ日本人学校（ドイツ）の3校だった。

まず、こちらから自校の桜の話題と、「桜を知っているか」「日本の桜をどう思っているか」についてのメールを送った。先方から返事があったら、さらにやり取りを続けた。話題は桜からどんどん広がり、「日本では今何をしていますか？」などのやり取りに発展した。桜の写真が送られてくることもあった。

同時に、自分たちの桜への愛着をさらに高めるために、地域ボランティアや桜の手入れ職人の講話をしていただいた。



外国に住む同年代の子どもたちとの交流とあって、桜だけではなく日常生活についての話題は子どもたちの関心が高かった。メールでのやりとりに子どもたちはとても興奮していた。特に、「桜ではないけれども、現地の人桜のように愛でている花」としてオーストラリアのジャガランダという木の写真を送られたときは、海の向こうの学校でも、私たちと同じように調べ学習をして送ってくれたんだと感じて、児童も私もとても嬉しかった。違う国に住む日本人同士が、日本語で双方の土地の文化について語り合うことができることの価値を実感した。

身近な存在である桜がこれだけの大きなプロジェクトになったことに私自身が興奮し、交流への意欲がさらに高まった。子どもたちの活動への追究心もどんどん深まり、休み時間にも交流相手に手紙を書いたり、届いた手紙をもとに、まとめ活動を工夫したりするなど、活動が発展していくことに楽しさを感じていたようだ。保護者からも、子どもたちが自慢気に桜活動について話をしていると聞いた。

さらに外国のことを知りたい、英語を使って交流できるようになりたいという意欲が高まり、中には、英語の学習をはじめた児童もいた。子どもたちが外国を自分たちに引き寄せ、外国に向けて目を開いた活動になったと感じている。

国際理解教育だから英語となりがちだが、それ以前に想いを伝えること、その必死さのほう的重要である。これは私自身が海外で感じたことでもあった。

しかし、顔を合わせて直接交流や打ち合わせができないので、どうしても無機質になってしまう。プライバシーの問題から写真を送りあうことも難しい。そこで、互いの子どもが手書きした手紙をPDFに変換して、直筆の手紙を送りあった。また、保護者の承諾が得られたプラハ日本人学校の子どもたちとは、子どもたちの写真の交流が実現した。

時差があるので、メールのやりとりにはどうしてもタイミングにズレが生じてしまう。欲しいタイミングでうまくメールが届かないこともあった。

また、双方ともに小3であり日本語の語彙や慣れの問題で、意味がとりにくい文面の手紙が届く場合もあり、そのときは聞き直したり、先生の補足が必要になってしまうという難しさもあった。

国際理解教育は学校で必須の仕事ではなく、プラスでやっているという位置づけだった。校長は応援してくれたが、それ以外の職務がおろそかにならないように留意した。同僚からは、「趣味の仕事」「桜の学習を外国まで広げる必要はあるの?」という声もあった。また、時差の関係でやり取りのメールは朝確認することになるのだが、「朝からメールの確認をしている」と言われることもあった。

その後、私が高校に異動したこともあり、児童の交流を次年度に引き継げなかった。交流した児童は下の学年の子たちにも広げたいのでどんどん話し、下級生も期待していたので実現にいたらなかったのは残念だった。

時差が大きいこと、やりとりに時間を要することなどの問題があるので、活動を長期的に計画する必要があったことが課題だった。自分がコーディネーターとなって毎年実施するなら可能だが、それでは私しか実施できないプロジェクトになってしまい、長期的な継続にはつながらない。

日本のことをもっと知りたいと思っている日本人学校の子どもたちにとっても、国内の学校との交流は意味があると思う。今後は、さらに日本人学校・補習授業校、現地校、そ

して日本の3校でのスクランブル交流ができれば面白いと思っている。日本人学校の子どもの強みは、現地と日本のことを知っていて、多少なりとも現地の言葉が理解できることなので、コーディネーター的役割を果たすことができる。実際には時差や言語の問題もあって教員の負担も大きくて非常に難しいとは思いますが、もしオンライン開催が実現できれば3者すべてにメリットがあると思う。



実践に至った経緯と提言

初任の頃から在外校勤務にあこがれていたが、応募の内規があつてなかなかチャンスがなかった。3度目の挑戦でようやく実現。もともとヨーロッパへのあこがれがあり、プラハに決まってとても嬉しかった。車を使わないと決めてトラムで3年間通勤した。理由は現地の生活になじむためと、チェコ語に触れるため。チェコ語は難しい言語だが、ヨガ教室や絵画教室、語学学校などで徐々にわかるようになっていくのが嬉しかった。

プラハ日本人学校は約100名のアットホームな学校だった。小3・5・1の担任を持ち、交流担当コーディネーターとして、全学年分の現地校交流などの企画を担当した。通訳と一緒に交渉に行き、新規開拓はもちろん、交流が中断していたところと再開したりした。多くの学校を見学したので、いま日本の教育現場にいながら「外国の学校では」という違った視点からモノが言えるのは、この時の知見によるところが大きい。「うちの子は、みんなができることができない」と子どもの発達に悩む保護者に対して、「その子の才能がどこで開くかはわからない。今はそっとしておいてよい」と、チェコの例を引いてアドバイスすることもある。

小1の学級は、日本での教育経験が全くない児童や、日本語を話さない児童など多種多様だった。その中で「あいうえお」から教えていくことの難しさを痛感した。日本の小1ならばあたりまえに触れている50音を全く知らず、「あ」が書けない、発音できない子もいた。国語の教科書にローマ字でルビをふり、保護者と協力しながら日本語の練習を進めた。しかし、塾や通信講座もない、授業ではじめて学ぶことがすべてという児童への授業は感動があり、教えることがとても楽しかった。

3年後、海外赴任前にいた学校に帰任したので、「外国から帰ってきた先生」として注目を浴びた。子どもたちから質問攻めにされ、何事も「日本人学校ではどうだった？」と尋ねられた。それが桜の実践につながった。

その頃、私の中には「帰ってきてから何もできていない」というジレンマがあった。悩んで先輩の帰国教師にも相談していた。子どもたちの言葉から桜の交流企画を発案して進めながら、「これで私の経験を活かせる」と思った。このほかにも、音楽科で扱う「山のポルカ」はチェコ民謡なので、チェコのダンスで踊ったりした。また、「世界がもし100人の村だったら」をテーマにワークショップをつくって好評をばくし、同僚の中には取り組んだ先生もいた。

チェコでの経験は、帰国後の教育活動に非常に影響を与えた。考え方、働き方、生き方すらも大きく変えたと思っている。

日本人の同調主義、目立ちたがらないところには以前から違和感を持っていたが、帰国後は自分の意見を大切にす、発信する生き方をするようになった。また、多様な人種、ジェ

ンダー、年齢の人があたりまえに共生していたチェコにふれて、自分も人の生き方に寛容になった。日本も徐々に変わりつつあるが、特に教育活動においてはまだまだタブーもあると感じる。それを取り払うような生き方をしていると思う。宿題を出すとき、共に活動するとき、保護者対応等、日々の細かなことでも、常に海外での経験にもとづく視点で考えるようにしている。日本しか知らない子どもたちに外国への目を開かせるのが教師の役目だと思うので、実体験に基づいてそれが実践できるチャンスをもたらしたのだと思っている。

今後、地域に多いブラジル人や姉妹都市からきている在住外国人と一緒に何かをやってみたい、SDGsにある「世界を知る」とつなげて、自分たちの地域と海外をつなげる活動など、やりたいことはたくさんある。

帰国後3年経つが、常に頭と心の中は海外にいるような気がする。それだけ自分が自分らしくいられたのだと思う。日本では得られなかった充足感が残っている。その感覚を抑え込まずに日本でも生かすことができれば、もっと柔軟にのびのびと生きられ、また、外国を知る教師としてもっと教育活動を広げていけるのではないかと思っている。

小学校英語教育と 小中連携、ICT活用

高木 浩志

現在の勤務校等
兵庫県宝塚市立南ひばりが丘中学校

在外での勤務校／帰国年月
上海日本人学校／1994年帰国

上海日本人学校赴任中に、英語とICTの必要性和将来性を認識。帰国後は全国海外子女・国際理解教育研究協議会（全海研）に所属し、活動しながら、宝塚市の中学校英語科担当者会や英語教育系の学会等に参加して研究発表を積極的におこない、全海研の副会長や兵庫県海外子女教育研究会（兵海研）の会長などを歴任。民間の助成金によるICT教育の研究開発にも取り組んだ。2016（平成28）年に市立小学校校長に着任。小中連携や教員への研修実施など、市内の公立小学校への英語導入にあたって推進役を果たしながら、校長会を通して、兵庫県内の小学校英語教育の組織作りにも尽力した。ICT教育においても、宝塚市や兵庫県でも校長会の代表として、推進した。



実践・活動の内容

教頭までずっと中学勤務だったが、2016（平成28）年度から小学校校長になった。新学習指導要領にもとづいて2020（令和2）年度から小学校3年生以上で英語教育が本格導入されることになり、2018（平成30）年から2年間の移行措置がとられていた。そのプロジェクトを推進するための人事だと思われた。

それまで英語を担当したことのない教員への指導をするために外部講師を呼んだ研修会を実施し、校長みずから英語の授業を担当した。宝塚市の小学校外国語活動部会にも新しく参加した。

小学校教員の中には、英語の授業に積極的でない人も多かった。当時の宝塚市の小学校では英語を指導できる教員も、指導案も、教材も足りなかった。英語免許を持っている教員も少なく、ALTが中心になっていた。（まだ、専科教員は配置されていなかった。）将来は担任が英語も担当することになるのに、日々学級運営や児童対応で多忙な教員は授業研究にあてる時間もなく、研修も一部の教師が受講したのみにとどまっていた。

しかし一方で、英語教育に興味を持っている教員はとても熱心に取り組み、実践的な英語を学んできた20代の教員が現場には増えてきた。

こうした状況下で、宝塚市小学校外国語活動部会（のちに外国語部会）では、中学の授業見学や実践的な指導に関する研修会などを実施して支援にあたった。また、小中連携として、学期に1回ずつの交流会や、小中互いの授業見学も実施、大学研究者からの助言も受けた。

外国語科・外国語活動の現場では、電子黒板や大型テレビが積極的に活用されていた。教員が英語の発音が苦手でも電子教材に補完させるなど、様々な場面で利用できる。しか

し、従来型の授業スタイルに固執し、機器の取り扱いを含めて電子教材に対して苦手意識を持つ教員も多かった。そこで、私自身も積極的に ICT 機器を活用しながら、研究授業をおこなって普及につとめていった。

現在の宝塚市内の小学校では...

- ▶ 月1回のALTの派遣日のみの外国語活動からの進展
- ▶ 年間計画はあるが...指導案が不足
- ▶ **5校で専科教員(24校中)フルタイム+非常勤 要英語免許**
- ▶ 授業者は、専科教員とALTが中心
- ▶ 指導できる先生の不足⇒要 中学・英語の免許
- ▶ 担任が指導? 専科・ALTが指導?
- ▶ 毎日が児童対応で忙しく、授業研究もできない
- ▶ 研修は一部の教師のみ
- ▶ **若い教師の増大⇒実践的な英語を学んできている。(20代)**

宝塚市小学校外国語部会では

- ▶ 中学校への授業見学
- ▶ 夏季研修会の実施 (実践的な指導、大学の研究者からの講話)
- ▶ 校区内の中学校との連携
- ▶ 授業研究会の拡大(ブロック制)
- ▶ 小中合同授業研究会の実施(小1回、中1回)
- ▶ 授業に活用できる資料の配付
- ▶ 兵小長での外国語活動・外国語科の部会発足(今年より)

宝塚市での小中連携の取り組み

- ▶ 今年で5年目
- ▶ 交流会を3回計画(学期に1回ずつ)
- ▶ 小中がお互いの授業見学(小学校へは、昨年始めて)
- ▶ 中学校校区内での小中の情報交換 保幼小中連携事業
- ▶ 中学校英語祭への招待
- ▶ 大学の研究者からの助言(3年目)

「(普通の小学校での実践から) 移行措置1年目の現在の状況からこれからの問題点を探る—新学習指導要領の実施に向けての方策を考える—」報告のスライドより



電子黒板、大型テレビの利用の様子



評価と課題

上海日本人学校からの帰任後、全海研に参画しながら、兵海研の中でも率先して活動した。さらに宝塚市の中学教員による英語教育と視聴覚教育（ICT）の担当者会に参加し、積極的に活動してきた。学会や部会などで積極的に研究発表を続けてきたことで、小中の英語とICT教育が私の教育実践のテーマであることが広く知られるようになっていた。「英語とICTの実践実績あり」と評価されたことで、多くの場から声がかかり、研究や発表の機会がさらに増えていったのだと思う。

発表することは大変重要である。それを直接聞いた人の役に立つだけでなく、次に広げるといふ効果も期待できる。

同じ理由で、様々な学会に積極的に参加して、発表の機会を持つようにした。これによって、日本各地に人脈ができた。



実践に至った経緯と提言

市立中学教員として宝塚市と西オーストラリア州メルビル市アップルクロス校の交換留学事業にかかわっていたことから、在外教育施設での教育に興味を持ち、1991（平成3）年に上海日本人学校に赴任した。当時70名程度の小規模校だった。天安門事件の直後で政情が不安定で、緊張感があった。

オーストラリアとの交流事業で現地の学校の授業見学をしていたので、ある程度こういう授業展開になるだろうと想像はしていたが、やはり日本以外の地で日本人の子どもたちを教えることは、国内の中学とは大きく違っていた。それまで教えていた下町の中学でのやり方からは大幅に変える必要に迫られた。まるでトンカチで頭を殴られたような衝撃だった。

多言語環境で育つ子どもたちの英語力はバラバラで、ネイティブスピーカーや、日本語よりも英語のほうが得意な生徒もいれば、英語初習者の生徒もいた。英語を使いこなしている生徒たちは、日本の教科書を使った「日本式の英語」に反発することも多い。一方で、中学校の英語は帰国後の高校受験に直結する。「入試で得点できる英語」が必要で、保護者からの期待も大きい。多様な英語力を持つ生徒たちの様子を見ながら、教科書以外の教材も活用しながら進めていった。

上海では中国語が中心だが、街ではホテルなどで英語も通じる。国際語である英語ができれば、いろいろな国の人と話ができると感じた。そして、日本人はもっと世界に目を向けないといけないと思った。

1994年はまだインターネットが爆発的に普及する前で、通信はFAXが主流、国際電話は高額で、日本とのやりとりにもとても苦労した。大学時代に研究室でコンピューターを使用してパソコン通信について知識があったことから、在外校におけるパソコン通信ネットワーク活用についての研究を実施、文部科学省に採択された。ICTは海外子女教育に活かせるものだという実感を得て、これから様々な局面で活用されるべきであると考えた。

多様な子どもたちに対する英語教育と、教育現場におけるICT技術の必要性を実感したのは、その後の教員生活の糧ともいふべき経験だった。この二つは、その後の私の教育実

践の中心テーマとなった。

帰任後の中学の中には文科省の国際理解教育の推進校もあり、帰国子女も多く在籍していてそのケアにもあたった。帰国子女が疎外感を持たないように配慮し、また英語の授業でリーダーシップを発揮できるように工夫した。その後派遣された神戸大学発達科学部附属住吉中でも、帰国子女クラスの授業を担当したこともあった。

帰国後の公立中学では、授業のやり方をまた変える必要があった。もちろん上海赴任前の授業スタイルに戻したわけではなく、上海の経験を活かして、授業の導入にオーラルを使った形を取り入れた。

公立中学では生徒指導に時間を要することもあり、英語を苦手とする生徒への指導に苦労することも多かった。どうすれば英語に興味を持って、授業を楽しんでもらえるかを考えて工夫を重ねた。その経験は、その後小学生への英語授業で教壇に立ったときに生きた。小学校英語は聞く・話すことが中心で、英語の面白さを、手を替え品を替えて伝えていく必要がある。中学で、学力が低かったり、英語という教科にまったく興味を示さない生徒に対しておこなっていたアプローチを応用することができた。

現在は再任用教諭として中学で特別支援の英語教育にも携わっているが、この経験はそこでも活用できることが多いと感じている。

中学の教育現場での仕事をこなしながら研究会などの活動が続けることは、時間的・体力的には大変なことでもあった。そんななかでもやってこられたのは、「世界を見てきた経験があるのだから、自分ができることはやりたい、やらなくては」という意欲だったと思う。

また、所属していた全海研や兵海研には活発に活動している先輩が多くいて、仲間にも恵まれていた。年に数回の研究会や懇親会で情報を共有した。周囲の刺激があったので、自分も頑張ろうという気持ちになった。切磋琢磨する場があったことが、長くモチベーションを保てた要因だと思う。だからこそ、これからはますます仲間を増やし、手をつないでいかないといけないと思っている。ただ、活動メンバーはやはり限られてしまう。意欲があっても多忙などの理由で続かなかったり、また、在外校勤務の経験に触れられたくないという人もいる。たくさんの人を引っ張り上げようと活動してきたが、やはり思うようにいかないこともあった。

研究会の活動には土日などのプライベートな時間を充て、日常の学校業務に影響がないように心がけたが、教諭時代には、学校の管理職にも活動に理解を示してもらえたのはありがたかった。

現在、小学校の英語教育はようやく流れに乗りつつある。しかしまだまだ英語を教えることを苦手としている教員は多い。そしてやはり現場は忙しくて大変だ。そういう現場をサポートするために、すぐに活用できる教材や指導法などをまとめて提供できないかと考えている。いわゆる「授業の作り方」のようなハウツー本はたくさんあるが、在外校経験のある教員らしく違う視点から、世界の教育現場の情報も織り込みつつ、教員の根本にかかわるようなものをまとめたいと思っている。

また、教員を目指している若い学生に、教員という仕事について伝えたい。多忙すぎて「ブラック」と言われる面があることは否定できないので、そこは変えていく必要がある。本当に、大変ではあるがやはり魅力のある仕事である。

上海日本人学校での体験があったからこそ、これまで頑張ってきたのだと思っている。日本人学校勤務は、私にとってはそれだけの価値ある体験であった。今後在外校に赴任する教員は、決して物見遊山の気持ちで赴任するのではなく、自分が海外でどのように変わることができるか、そして帰国後にそれをどう活かすことができるかをよく考えてほしい。在外校勤務は、帰国後のほうが重要である。

上海時代から数えて、この30年間のインターネットの普及による通信環境の変化は劇的だった。ICT教育も変化してきているし、新しい取り組みもますます増えている。

最近ではメタバースという言葉がブームになっているが、今後はこうした仮想の世界が当たり前になっていく。私たち大人世代からは想像しにくいことだが、実は子どもたちはすでにゲームなどを通して、すでにその世界に慣れ親しんでいる。

今までは教室対面授業に勝るものはないといわれてきたが、コロナ禍もあってオンライン授業も急速に普及することになった。児童生徒に一人一台配布されるようになったタブレットの活用も、ますます進んでいこう。タブレットで優れた教員による配信授業を受け、教室ではインストラクターがそれをサポートする。先生がいらないという未来が来るかもしれない。

ラオスの不発弾から 工業生産と世界の未来を考える

中村 祐哉

現在の勤務校等
広島県熊野町立熊野第一小学校

在外での勤務校／帰国年月
上海日本人学校虹橋校／2014年帰国

小5社会科「工業生産に関する単元」と小6社会科「国際協力に関する単元」二つの単元を、「ラオスの不発弾」を教材として連携させ、批判的に考える力と未来像を予測して計画を立てる力の育成を目的とした2年間にわたるプログラム。話し合いの場は、教員も驚くほど活発なものになった。さらに、既習事項であるSDGsとも関連させて、未来の世界の姿とそこにかかわる自分について考えた。



実践・活動の内容

本実践は、小5社会科「わたしたちの生活と工業生産」と小6社会科「世界の未来と日本の役割」の2つの単元を通して、批判的に考える力と未来像を予測して計画を立てる力を育てることを目的としている。

1. 小5社会科 「わたしたちの生活と工業生産」

身近な工業製品調べからはじめて、日本の工業技術力と、技術立国である日本という概念をつかんだ児童に対し、ラオスの不発弾から生まれたスプーンの実物教材を提示。命を奪う工業製品である爆弾が、日本の工業技術によってスプーンになり、食事、つまり命を支える工業製品に生まれ変わっていることを学んだ。児童は、それまで人の生活を豊かにするものとして学んできた工業製品のなかに、爆弾という人を幸せにしないものがあることを知る。さらにそれらの形と役割を変えていくことに重要な役割を果たすのが工業技術力であると落とし込んだ。児童は「戦争と平和について考えた」「スプーンも爆弾も工業製品」「不発弾を生まれ変わらせた工業技術はとても大切」などの感想をもった。

2. 小6社会科 「世界の未来と日本の役割」

小5でラオスの不発弾についてすでに学んでいる児童を対象に実施した。日本の国際支援について学び、その中で特にラオスへのインフラ支援などのODA実績を提示しながら「日本がこれからすべき本当に必要な国際支援とは何か」について考えていった。児童からは最初は「日本が支援をするのは嬉しい」「世界への恩返し」など、「支援をしてあげる」立場から支援は良いことであるという意見が出たが、支援が50年以上続いていることを資料から読み取った後は、日本とラオス双方の立場から、長期間にわたって行われている継続的な支援のあり方を批判的な視点から捉える感想も見られるように

なった。次に、歴史的な経緯を踏まえて現在の支援の課題を考えた。支援が他国への依存を生んでいる現状や経済的自立への道筋を示せていないなどの課題を検討し、未来の国際支援がどのようにあるべきかを話し合った。

さらにこのカリキュラムの最終時には、既習のSDGsに関連付けて、ラオスが「18番目のSDGs」として示している不発弾処理問題を取り上げた。不発弾処理はラオスの国内問題なのか、世界的に取り組むべき問題なのかについて話し合い、最終的にはSDGsに掲げられた17項目だけが世界の課題であるわけではなく、さらに2030年のゴール以降が重要であるという結論を得た。

<p>2020年度 JICA地球ひろば 国際理解教育/開発教育指導者研修</p> <p>国際（理解）教育/開発教育 小学校3年 社会科学習指導要領</p> <p>【実施例】</p> <table border="1"> <tr><th>学年</th><th>単元</th><th>領域</th><th>展開/展開の形態</th></tr> <tr><td>3</td><td>1</td><td>社会科</td><td>社会科</td></tr> <tr><td>3</td><td>2</td><td>社会科</td><td>社会科</td></tr> </table> <p>【実施例】</p> <p>1. 世界の多様性（国名）</p> <p>2. 異なる文化・価値</p> <p>3. 国際社会</p> <p>4. 近況の目録（目標達成を振り返る）</p> <p>5. 近況の目録（目標達成を振り返る）</p> <p>6. 近況の目録（目標達成を振り返る）</p>	学年	単元	領域	展開/展開の形態	3	1	社会科	社会科	3	2	社会科	社会科	<p>2020年度 JICA地球ひろば 国際理解教育/開発教育指導者研修</p> <p>【研究課題の進め方】</p> <p>1. 研究課題の進め方</p> <p>2. 研究課題の進め方</p> <p>3. 研究課題の進め方</p> <p>4. 研究課題の進め方</p> <p>5. 研究課題の進め方</p> <p>6. 研究課題の進め方</p>	<p>2020年度 JICA地球ひろば 国際理解教育/開発教育指導者研修</p> <p>【研究課題の進め方】</p> <p>1. 研究課題の進め方</p> <p>2. 研究課題の進め方</p> <p>3. 研究課題の進め方</p> <p>4. 研究課題の進め方</p> <p>5. 研究課題の進め方</p> <p>6. 研究課題の進め方</p>
学年	単元	領域	展開/展開の形態											
3	1	社会科	社会科											
3	2	社会科	社会科											
<p>2020年度 JICA地球ひろば 国際理解教育/開発教育指導者研修</p> <p>【研究課題の進め方】</p> <p>1. 研究課題の進め方</p> <p>2. 研究課題の進め方</p> <p>3. 研究課題の進め方</p> <p>4. 研究課題の進め方</p> <p>5. 研究課題の進め方</p> <p>6. 研究課題の進め方</p>	<p>2020年度 JICA地球ひろば 国際理解教育/開発教育指導者研修</p> <p>【研究課題の進め方】</p> <p>1. 研究課題の進め方</p> <p>2. 研究課題の進め方</p> <p>3. 研究課題の進め方</p> <p>4. 研究課題の進め方</p> <p>5. 研究課題の進め方</p> <p>6. 研究課題の進め方</p>	<p>2020年度 JICA地球ひろば 国際理解教育/開発教育指導者研修</p> <p>【研究課題の進め方】</p> <p>1. 研究課題の進め方</p> <p>2. 研究課題の進め方</p> <p>3. 研究課題の進め方</p> <p>4. 研究課題の進め方</p> <p>5. 研究課題の進め方</p> <p>6. 研究課題の進め方</p>												

国際（理解）教育/開発教育 学習指導案 (出典：2020年度 JICA 地球ひろば 国際理解教育/開発教育指導者研修)



評価と課題

本実践は、ESD 教育の一環としての側面ももつ。児童は、この二つの単元の学びを通じて、ESD 教育で重視される①批判的に考える力、②未来像を予測して計画を立てる力、③多面的・総合的に考える力を養い、④つながりを尊重する態度で授業に取り組むことができた。

また、すでに1年間学んできたSDGsと組み合わせることによって、2030年という自分たちが大人になっている時代の世界について考えることができた。

毎年実施しているが、その年の児童実態に即しながら、少しずつアレンジしている。児童の反応はとてもよく、積極的に話し合いに参加する姿が見られた。特に(2)においてODA支援額ランキングについて話し合った際は、「日本のランキングはアップすべき・上がってほしい」と「ランキングは関係ない」でクラスが14名対15名と真っ二つに割れ、それぞれが根拠を示しながら、活発な議論が行われた。

世界の未来と日本の役割
6年 **ランキングはUPすべき派**

単元学習キーワード
・国際連合(UN)・SDGs(持続可能な開発目標)
・ユニセフ(国連児童基金)・JICA(経済合作開発機構)
・ユネスコ(国連教育科学文化機関)・ODA(政府開発援助)
・ユニタール(国連情報機関)・NGO(非営利組織)

◎日本のODA支援額ランキングは世界第4位(2018)でした。学習を進めてきてランキングはどう変化することを期待しますか?
ランキングが上がって欲しい。ランキングは関係ない。
ラオスや困っている国々を助けて日本の信頼性や親りにならという世界に見せるためランキングは上げてほしいです。
◎あなたにとって国際協力・国際支援・国際援助とは?
私はこの3つが国際協力が好きです。私は今の世界の発展のためにJICAが最も好きになりました。その理由は、JICAは世界のために支援と協力を援助しています。素晴らしいなと思ったからです。

本時の学びからODA支援額ランキングについて価値判断・意思決定①

世界の未来と日本の役割
6年 **ランキングは関係ない派**

単元学習キーワード
・国際連合(UN)・SDGs(持続可能な開発目標)
・ユニセフ(国連児童基金)・JICA(経済合作開発機構)
・ユネスコ(国連教育科学文化機関)・ODA(政府開発援助)
・ユニタール(国連情報機関)・NGO(非営利組織)

◎日本のODA支援額ランキングは世界第4位(2018)でした。学習を進めてきてランキングはどう変化することを期待しますか?
ランキングが上がって欲しい。ランキングは関係ない。
ランキングが上がるにつれて他の国々の信頼性も上がっていくと思うけれど、ランキングの順位にならなくても支援をしているだけではいいと思う。支援をするには意味があると思えます。
◎あなたにとって国際協力・国際支援・国際援助とは?
私の国は発展しているから、他の国を支援していくのはいいと思います。特に国際協力では、相手の国と協力して発展させることが大切だと思います。日本は世界を助けているので、日本はいいと思います。

授業時で使用したワークシート

さらに、「55年も続く日本の国際支援は本当の支援と言えるのだろうか?」についての話し合いでは、支援が最初から国家予算に組み入れられている現状から支援依存の問題や、誰のための支援なのかといった本質的な内容に発展した。児童の発言が相次ぎ、この場において私がしたことは、「国際支援の今後」として「支援を増やす・減らす」×「支援を止める・続ける」の分布図を作成した程度であり、「教師の出番はない」と感じるほどだった。教室の様子を見ながら、大きな手ごたえを感じた。

55年も続く日本の国際支援は、本当の支援と言えるのだろうか?

最後に支援とてなるの? (支援って何?)
Q.1 どこに支援が必要なの? (義務的...)
経済より教育、物より人、とまで支援が深い。
Q.2 長く続く支援は良いのかな?
類似はいい、他の国にさせる。自立する気がない。
Q.3 誰のための? 何のための支援なの?
貧しい人、困っている人 // 豊かな、平和、自立
貧しい国、救済したい国 // 自分たちの国づくり

支援を増やす / 支援を減らす / 止める / 続ける

3 / 2 / 23

キーワード: JICA

支援してもはや... やめられない、止まらない。支援依存なのかな?
日本とラオスと世界? ぶりがえり
あなたにとって、日本にとって、本当の支援って何?

問題 『55年も続く日本の国際支援は、本当の支援と言えるのだろうか?』

授業時の板書

一方で、批判もある。小5の産業学習である工業生産と、小6の公民的分野である国際協力は、本来初等教育の教科教育社会科の中においては直接的に関連付けることが少ない単元同士であるが、それを本社会的事象一例にフォーカスして紡いだ実践である。「これは社会科ではなく、総合的な学習の時間で取り組むほうが良いのではないか」と、教科の枠を超えて展開されているという評価を受けたこともあった。

本授業は現在のところは私が継続して担当しており、内容を深めたり、対象を広げたりすることができているが、特定の教員しか実践できないということは継続性の点から望ましくないと感じている。今後は内容のブラッシュアップを進め、多くの教員が取り組めるようなプログラムにしていきたいと考えている。

私が扱った教材はラオスや不発弾だが、それにこだわる必要はない。大切なのは2年間で児童の社会的事象に対する思考がどう変容していくかである。私の提案する指導案の通りにすすめてもよいが、外枠だけを残して中身を差し替えてもよいと思うし、むしろ、差し替えをすることによって目の前の児童により即したものとなり、授業や単元での児童の学びの質は向上していくと思う。

本単元は、関連事例であればどんな事象や教材を取り扱っても類似した実践展開ができる。「国際」や「グローバル」にこだわって無理やり外国の事例を引いてくる必要もない。たとえば、地元名産の熊野筆をテーマに展開するなどグローバルな視点からも、この実践は展開可能だと考えている。



実践に至った経緯と提言

広島市の公立小学校に5年間勤務した後に、2012年に上海日本人学校に赴任した。教員だった父がかつて在外校勤務を志していた話を聞いており、私自身も教員になったときから、いつかは日本人学校の教壇に立ちたいと思っていた。

上海日本人学校虹橋校は当時児童生徒1,500名の大規模校で、小5と小6をもちあがり担任した。他自治体出身の先生方と協働することは大変刺激になり、学びへのモチベーションの高い子供たち、教育熱心な保護者と様々な取り組みができた。

当時は中国の大気汚染がひどく、世界的にもそれがクローズアップされていた時期だった。また上海市内でも、鳥インフルエンザが流行しはじめていた。

さらに、中国では反日感情が高まり、各地で反日デモが頻発していた。外出先では日本語を使わないように気を付けているという在留邦人も多く、生活には緊張感があった。日本人学校も外壁に落書きをされたり、物を投げ込まれたりした学校もあった。休校を余儀なくされることもあった。

しかし、学校の現地スタッフは警備を厳重にしたり、市内の現状を知らせてくれたりするなど大変よくしてくれた。周囲の人から心配する声をかけられることもあり、国同士の問題と、人間の心と心がつながることは全く別のものなのだと実感した。

2014年に帰国後は、在外校勤務経験者として国際教育の授業をつくるにあたって、中国の経験にだけ基づくのではなく、もっと汎用性のあるものにしたいと考えた。そこで中国の記憶が新しいうちにほかの国も知って、共通点を探したいと考えて2016年JICA中国センター（広島県東広島市）の主催する国際教育・開発教育指導者研修（JICA地球ひ

ろば主催)に参加した。教員のための1年間のプログラムで、ラオスをテーマに授業を作る研修を受けた。教材化する素材を獲得するための現地訪問で出会ったのが「工業製品としての不発弾」だった。

このJICA教師海外研修からのつながりで日本国際理解教育学会にも参加し、現在、日中韓三カ国共同ストーリーテリングプロジェクトにかかわっている。これは日本国際理解教育学会による中国と韓国との共同研究で、絵本「お姫様の特別な旅立ち」を使って各国で授業づくりをしている。私は小6の特別の教科 道徳で、何不自由ない暮らしを送っていたある姫が退屈に耐えられなくなり旅に出るというストーリーから、違いを乗り越えて多様性を尊重するということについて考える授業を展開した。いずれ各国から実践報告が届くのがとても楽しみだ。

これらの実践にも在外教育施設での経験が生きていると感じることが多い。授業をつくっているときに取り上げる素材に自分の経験を当てはめることがあるが、在外教育施設勤務経験によってその引き出しが多くなったように思う。

帰国後は、国際理解教育への意欲をもっているにもかかわらず、日本の現場とのギャップを少なからず感じた。その意味では、全国海外子女教育国際理解教育研究協議会(全海研)の中国ブロック大会での発表や、機関誌の発行などを通して日本人学校勤務経験のある人とつながることができたのはとてもよかった。同じように帰国した教員が別の学校で頑張っていると考えると、とても励みになった。

上海は、私にとっては大切なもう一つの「帰る場所」となった。その場所、その国との関係を紡ぐことは、これからの自分の人生を豊かにすることにもつながると思う。いつか再び、他の国に住んで、大切な場所をさらに増やしたいと思っている。

世界中にある日本人学校には、先生を待っている子供たちが必ずいる。そこで出会った教え子も、一生大切な存在になる。このかけがえのない経験は、世界中どこの日本人学校でもできることだと感じている。

青少年交流の家という「場」で 実現した国際理解教育

武原 智明

現在の勤務校等
広島県立生涯学習センター 社会教育主事

在外での勤務校／帰国年月
カイロ日本人学校／2009年帰国

公立小学校勤務を経て交流人事で赴任した国立江田島青少年交流の家を会場に、様々な国際理解教育関係の取り組みを実施。2017年からは、事務局を担当している広島国際理解教育研究協議会による帰国子女や在日外国人児童生徒を対象とした1泊2日のキャンプ「集まれ！小さな外交官」の会場を江田島に移し、2020年には、教育事業として「多文化共生理解教育研修会」を開催。



実践・活動の内容

● 集まれ！小さな外交官

広島国際理解教育研究協議会による1泊2日のキャンプで、広島周辺に居住する帰国子女や国際結婚家庭や海外にルーツを持つ子どもたちを対象に実施している。教育委員会を通じて学校経由で告知するほか、海外派遣社員がいる企業にも社員への配布を依頼している。2020、2021年はコロナ禍で中断したが、昭和の終わりから30年以上の歴史を持つ取り組みである。

私は2009年カイロからの帰国後に広島国際理解教育研究協議会に参加し、ずっとこのキャンプにかかわって、事務局をつとめてきた。2017年に国立江田島青少年交流の家に赴任したのを機に、キャンプの会場を江田島に移した。広島市内からフェリーで海を渡るという非日常感もあったようで、子どもたちにも好評だった。

小学生から高校生までが数十人集まって、野外活動施設でごはんをつくり、キャンプファイアを楽しむ。クイズなどのアトラクションも用意されている。夜にはいくつかのグループに分かれて、「学校で英語の発音がきれいすぎてからかわれた」「近所の友達には海外の話をしにくい」「わかってもらえない」「外国から日本の学校に来たが、言葉がわからず、生活に慣れることができずに困ってる」など、普段の暮らしのなかで感じていることを語り合う。広島の帰国子女は首都圏・関西圏に比べて数が少ないので、周囲に同じような経験をした子がいないということも珍しくない。しかし、このキャンプに来れば、「あるある」「わかる」「そうだよ」と、共感しながら聞いてくれる仲間がいる。高学年や中高生のグループでは、話すうちに深い内容になっていくことも珍しくない。話し合いに参加する教員のほうも在外校勤務経験があるので子どもたちの気持ちを汲み取り共感することができる。また、子どもたちと同じように普段は学校で孤立しがちな帰国教員にとっても、貴重な交流の場になっている。



評価と課題

● 生まれ！小さな外交官

過去のキャンプ参加者が、大学生になってボランティアとして活動してくれることがあり、良い循環ができている。また、将来留学したいとか、海外で仕事をしたいという夢を持つ子どもたちも多く、長く継続していると、そういう外向きの気持ちを持つ子どもが育つのだということを実感している。日本の学校では孤立しがちな、海外とかかわりのある子どもたちの拠り所になれていると思っている。

2020年からはコロナ禍で中断している。すでに子どもたちが自主的にオンラインで集まっているところもあるので、今後何かできることを考えて取り組んでみたい。

● 多文化共生理解教育研究会

遠方からの参加者もいて手ごたえを感じた一方で、地元教員の参加はなかった。

最も来て欲しいと考えていたのは、多文化の子どもたちがいる教室で教えている教員や、日本語指導者、そして行政の担当者だった。行政と日本語支援ボランティアとの間に不協和音が生じているケースがあるとも聞いていたので、「多文化共生」を言う前に、それにかかわる人がまずきちんと連携しないといけないと考えていた。その現場に届かなかったのは残念だった。

研究会は継続したかったが、2021年春に異動したので実施できなくなってしまった。現任地の広島県立生涯学習センターでの開催を模索しているところである。



実践に至った経緯と提言

2007年度から3年間、カイロ日本人学校に勤務した。全校で40人くらいの小規模校はアットホームでとても楽しかった。赴任前は不安もあったが、食事も治安も、心配していたほどの問題はなかった。日本や欧米とは違うイスラムの文化に触れることができ、学ぶことも多かった。エジプトでは、同じものでも外国人と現地の人では価格が違う。この「外国人価格」について最初は違和感があったが、所得の低い現地の人と、給料を何十倍ももらっている人の購入価格が違うのはあたりまえでそれが平等だという考え方に、なるほどと納得した。これは日本にいたら触れられなかった発想だったと思う。

教育についての価値観も変わった。ひとりひとりの子どもにとっての「平等」とは何かを考えるうちに、全員に同じものを提供することだけが平等ではないと思った。

帰国後は、広島県廿日市市の小学校に勤務した。帰国してすぐから、広島国際理解教育研究協議会に所属し、活発に活動をはじめた。現在も事務局を務めている。

勤務校では、自分の海外経験を直接活かせる場はあまりなかった。全校朝会で10分くらいスライドを見せて紹介する機会はあったが、自分のクラスだけ別の授業をするわけにもいかないの、算数の授業中にピラミッドや古代文字の話題を少し紹介するくらいだった。国際理解教育はなかなか実現できず、もどかしさを感じていた。ただ、小6社会科の国際貢献の単元で、JICA 青年海外協力隊経験者などをゲストスピーカーに招くことがあり、そういう時にカイロで培った人脈が活かしたことはあった。その後、JICAの国際協力レポーターに応募し、学生や社会人に混じってスリランカに行き、日本が国際貢献をして

いる様々な施設を見学した。

2017年に、交流人事で 企画指導専門職として国立江田島青少年交流の家に異動した。江田島はかきの養殖がさかんだが、漁業従事者の高齢化が進んで、フィリピン、ベトナム、中国などからの労働力に頼っている。外国人の労働者の子どもたちは地元の学校に通っている。前任地の廿日市市には外国人はほとんどいなかったのも、とても驚いた。地元も学校現場で進む多文化共生の現状を知って、自分も国際貢献として何かをしたいと考えて「多文化共生理解教育研究会」を企画した。

江田島では「集まれ！小さな外交官」「多文化共生理解教育研究会」のほかにも、広島国際理解教育研究協議会の英語部会事業であるグローバルチャレンジキャンプも開催した。1泊2日で英語を中心に海外の言葉や文化に触れるイベントで、広島大の留学生と英語を使った交流をするもので、そこにもフィリピンにルーツを持つ子どもたちが参加していた。日本語はもちろん英語も話せない子どもが日本にいるということも、ここでも実感した。

このほか、青少年交流の家の母体である日本青少年教育振興機構では毎年ミクロネシアから子どもと引率先生を招いているが、その広島部分を担当。広島観光・江田島の小学校との交流・県内家庭でホームステイなどを実施した。これらは、江田島に赴任したからこそできたことだったと思う。

私の場合は、広島国際理解教育研究協議会と江田島青少年交流の家という場があって国際理解教育につながる企画を実現できた。学校で、個人的に取り組むのは難しかったと思う。

県から派遣されたので、カイロでの経験は県に返さないといけないという意識はずっと持っていたが、自分の職場では貢献できる場があまりなかった。しかし、研究会ならば役に立てるので、その活動のなかで少しでも返そうと思ってやってきた。研究会の中には忙しくても頑張っている仲間がたくさんいるので、自分もやめられないと思っている。

しかし、研究会に新しく参加して在外校勤務を活かそうとする人は多くない。在外校勤務は自分のキャリアのためと割り切っている人もいる。教育委員会にも、今のところ帰国教員の経験を活かすという発想はあまりないように思われる。

2021年から広島県立生涯学習センターで社会教育主事として勤務している。広島県教育委員会所轄で、社会教育全般を取り扱う部署である。公民館活動、子育て支援、防災、そして最近住民の生きがいづくりをテーマとする生涯学習活動の支援が多い。

社会教育の中においても、国際理解や多文化共生は大きな柱のひとつではある。しかし、なかなかそこまで手が回らないのが現状で、どうしても後回しになってしまっている。さらに今年着任したばかりなので、すでに前年度からスケジュールが決まっているものがほとんどで、今のところは新しいものを入れる余地がない。

しかし、社会教育の中の家庭教育支援の分野でも、外国人の保護者が増えていることによって外国語対応などが大きな問題になってきている。ここに、国際理解の視点を少しずつでも入れていければと考えている。

江田島青少年交流の家で実施した「多文化共生研究会」は、今年度は開催できなかったが、次年度以降再開するつもりだ。子どもの教育支援のテーマをもっと発展させて、現場で頑張っている教員や支援者にも参加してもらえる大きな大会に育てたいと思う。仲間や、一緒にやってくれるスタッフを募集中である。

現地でのつながりから 高知と上海の高校生交流を実現

尾崎 靖司

現在の勤務校等
高知県立高知東高等学校

在外での勤務校／帰国年月
上海日本人学校浦東校／2019年帰国

上海日本人学校在任中に見学した日本語クラスを持つ高校と、高知の県立高校の交流を実現。来日した上海の生徒たちは高知市内の家庭にホームステイし、日本の高校生活を体験。滞在中に国際シンポジウムにも参加した。現在は中国語科のある別の県立高校で中国現地校との交流事業企画を進めている。



実践・活動の内容

● 上海外国語大学附属外国語学校東校と高知県立高知西高校の交流

上海日本人学校（中国）在任中には、学校業務での交流以外にも個人的な伝手をたどって、日本語の授業をおこなっている現地の学校を積極的に見学していた。そのうちの1校である上海外国語大学附属中学東校（日本の高校課程に相当、略称：上外附中東校）は日本語だけでなく様々な言語の学科を持つ名門校で、親しくなった教員から、日本の学校と交流したいという相談を受けた。

上海日本人学校では定期的に現地校と交流しており、そこでは、子どもたちが片言の英語と日本語、そして中国語でお互いに働きかけ、好きなアニメや漫画など共通の話題で仲良くなっていく。その様子を見ながらこれが国際交流だと実感していた。そして、このような交流を地元高知でもいつか実現したいと考えていた。

そこに持ち掛けられた相談だったので、私のほうからも積極的に「高知県の高校はどうか」と提案した。先方も乗り気になったので、学校探しを始めた。

上海赴任中の国内在籍校にまず打診したが、ちょうど統合を控えており無理だった。次に、英語科があり、国際交流に力を入れている県立高知西高校に相談したところ快諾、話が進むことになった。

上外附中東校と高知西高校は姉妹提携を結び、生徒が高知を訪問する計画が順調に進んだ。その途中2019年3月に私は帰任し、別の高校に着任した。しかしこの交流事業にはそのまま関わり、その年の7月に4人の生徒と引率教員を迎えた。一行は4泊5日で高知を訪問し、ホームステイ、学校体験、部活体験などの交流を通して、日本の生活を満喫した。さらに市内のホールを借り切って実施された高知西高校主催の国際シンポジウムにも参加。別の事業で来日していた香港の学校と、西高校の生徒とともに、英語、中国語、日本語の三か国語を駆使してシンポジウムを盛り上げた。

【仕事の品格】

「高知西高校で、交流会や部活動を体験しました！」



高知西高校での交流会のようす

【仕事の品格】

「高知西高生、香港の生徒、上海外国語大学附属中学の生徒と英語でトークセッションを行いました！」



国際シンポジウム トークセッションに参加

● 高知東高校と中国の学校との交流事業

現在勤務している県立高知東高校には中国語科があり、毎週ネイティブスピーカーの教員から指導を受けている。ここでも中国の学校と交流をしたいと考えて、日中友好協会などの人脈から交渉を始めていて、すでにいくつかの話が具体的に進んでいる。安徽省からは、2019年秋に省の訪問団が見学を訪れており、今後の交流事業展開について話し合っている。湖北省黄冈市外国語学校（高校相当）からは、「高校生が日常で使うような、生きた日本語に触れたい」などの要望を受けている。

コロナ禍で当面の直接交流ができない状況になっているが、オンラインではやり取りを続けており、中国語で書いた手紙を送りあったり、コロナ終息を祈る千羽鶴を贈るなどの交流を地道に続けている。2021年には、高知東高校と高知の良さをアピールする動画（日本語／中国語）も作成し、学校ホームページで近日公開予定である。これからも取り組みを広げていきたいと考えている。

■ 高知東高校ホームページ

<https://www.kochinet.ed.jp/higashi-h/>

上外附中東校の生徒のひとは、高知で経験した学校生活のことを、掃除、かき氷、発表会などと具体例を挙げて「本当に夢みたいな、何よりも忘れられない体験となりました。「高知」と聞いたら、今でもドキドキしてしまいます」と作文に記している。

日中双方の生徒が、交流によってお互いの国のことや地域のことを身近に感じ、もっと交流したいと考えているように感じる。交流事業を一過性のイベントで終わらせるのではなく、課題を共同して解決するようなプランを考えていきたい。

上海在任中に見学訪問した上海市内の高校生・大学生に、アンケート調査をしたところ、彼らの興味の対象は「日本の学校生活」であった。日頃から日本のアニメや漫画に親しんでいるので、学校の部活動や放課後の過ごし方などの日常生活描写にあこがれがあるようだった。それならば高知でも十分に体験できる。地方の学校は、中央から距離があることで国際交流に消極的になりがちだが、そんな必要はないと思った。

予算、所要時間、距離を考えると、中国・韓国等の東アジアは国際交流事業を実施しやすい。赴任先が上海で、現地で人脈を作れたことはとても良かったと感じている。

現在のところ、実際にやったのは「上海の生徒たちを呼んできた」というだけで、取り組みの実績はまだ発展途上だと思っている。



実践に至った経緯と提言

ずっと高校教員として勤務していたので、日本人学校の存在は遠かった。たまたま中高一貫校に勤務したときに募集案内を見て興味を持ち、中学勤務3年以上という条件を満たしてすぐに応募した。当時日本では中国といえばひどい大気汚染や「段ボール肉まん」が話題で、赴任前の印象は正直良くなかった。

上海勤務が決まった時に、地元の日中友好協会を訪問し、現地の人脈を紹介してもらった。赴任してすぐに連絡を取り、自宅マンションのトラブルがあった時に助けてもらったりした。特技の空手の上海支部でボランティア指導員をして「日本から来た先生」として中国人生徒とも親しくなった。日本語教室のボランティアやスピーチ大会の審査員に友情参加したこともある。「どうせ飲むなら地元の人と」と考えて、積極的に友人を増やしていった。現地の人々には、本当に助けられた。文化や言葉、価値観などの違いはあるものの、相手を理解することが国際理解だということを感じることができた。それを生徒たちに伝えたいという気持ちが、現在の活動につながっている。



ボランティアで空手の大会審判

また、上海に高知の教員が行くということの意味を考えた。高知で上海というと、1988年の高知学芸高校修学旅行生の上海列車事故が一番に思い浮かぶ。私自身も、小学生のときに地元高知で連日それを報じるテレビニュースを見ていた。以来、高知と上海の関係には、常に陰が付きまとっている。未来のためにはこのままではよくない。自分は、その不幸な歴史を乗り越えるくらいの熱量を持って赴任しないといけない。しかし、熱意のあまり無神経なことをしたら犠牲者や遺族に対して礼を失することになる。これは、安易な気持ちでは行けないと思った。

さらに、別の面からも「高知」を意識していた。高知には国際学科を持つ学校もあるが、現実には外国人と会うことも少なく、国際交流も異文化交流も実体験しにくい。海外から帰国した生徒の経験が活かされることがないばかりか、授業の未履修部分が問題にされるなど、むしろ海外生活経験がマイナスになってしまうこともある。教員の側も帰国子女に接してきた経験が少ないので、その困り感を把握できない。さらに、在外校勤務を終えて帰国した教員が、現場にうまく適応できないという例も聞いていた。

そんな状況から、自分は高知県から派遣されるのだから高知に還元できる何かを持って帰らないといけないと、赴任前から強く考えていた。いつか、地方の生徒が留学生と触れ合ったり、海外を身近に感じたりすることができるような舞台を用意したいと考えていた。

その思いは、上海日本人学校での現地校交流で、ますます強くなった。生徒たちがイラストや漢字を使ったり、ジェスチャーを交えてコミュニケーションをしたりしている様子を見て、逞しさを実感するとともに、少しの努力でこんなコミュニケーションができるのだと実感した。教育の場で国際交流した経験を持つ子どもたちが大人になったとき、未来を変えることができるのではないかと。そうすることで、国家間の難しい問題の解決の糸口が見えるかもしれないと、本気で思うようになった。

しかし、日本語学校の訪問時にとったアンケートでは、高知はじめ四国4県の知名度の低さに愕然とさせられた。北海道・宮城・東京・京都・高知・徳島・香川・愛媛・福岡・沖縄の名前を挙げて知っている地名に○を付けてもらったが、東京・大阪・京都はともかく、北海道や福岡、沖縄よりも○が少なかった。

アニメ・マンガの影響で、日本の高校生活や部活にあこがれている中国人は多い。それならば地域の知名度は低くても高知でも実現できるので、今後留学先として売り込むことを考えている。そして個人的には「高知にいる尾崎」の姿を、今も滞在中に培ったコミュニティに向けて発信し続けている。

現任校の高知東高には中国語の授業があるが、興味関心程度でとどまっている。身につけた中国語を使って、「中国を旅したい」とか「ビジネスに活かしたい」という生徒はまだいない。また、国際交流や外国人イコール欧米人というステレオタイプのイメージを持っている。まずはこれを覆そうと思っている。



湖北省黄冈市外国語学校と高知東高校とのオンラインミーティング

国同士がうまくいっていないのだから、自分たちが何をしても意味がないと生徒たちはいう。しかし未来をつくっていくのは子どもたちである。友人がいる国とは誰も戦争したくない。だからこそ国際交流をして、外国人とコミュニケーションした記憶を持ってほしいと願っている。そうすればきっと、世界は悪い方向には進まないはずだ。

隣で困っている人がいたら大丈夫？と尋ねるのがあたりまえだ。外国人の場合は言葉が通じないから声をかけられないというのではなくて、同じ人間として手伝えるようになってほしい。言葉はできなくても誰とでもコミュニケーションできるような、度胸のある生徒をつくりたいと思っている。

帰国後は、高知県の国際理解教育研究協議会で活動しており、先輩や仲間たちに良い刺激を受けている。しかし、活動の場は限られている。また、国際交流の会合などに参加するものの、思い出話のほうが多くなってしまっているのが残念だ。

これから在外校に赴任する人に向けて「海外に行く時の心得」などを共有できる場があればよいと思う。世界中に90もある日本人学校にせっき国のお金をかけて派遣されるのだから、そこでつかんだ何かを持って帰って各自の地元でばらまいてほしい。

「いとすぎ植樹祭」で 偏見のない社会を目指す

寺尾 満寿男

現在の勤務校等
愛媛県今治市立吉海小学校

在外での勤務校／帰国年月

ボンベイ日本人学校（現ムンバイ日本人学校）／1987年帰国
北京日本人学校／2018年帰国

1980年代にインド・ボンベイ日本人学校、定年退職後の2010年代到北京日本人学校に勤務した。インドからの帰国後にはじめた赤十字活動の精神と二度の海外経験で得たものを織り交ぜて、地元愛媛の子どもたちに伝えるために、「いとすぎ植樹祭」として、赤十字のシンボルツリーであるいとすぎの苗木植樹と講話の活動をしている。



実践・活動の内容

今治市には、多くの観光客やアジアからの技能実習生がいる。その人々に対して、子どもたちが偏見なく接することができるようになってほしいと願って、北京日本人学校からの帰任後、赤十字の理念に関連づけた「いとすぎ植樹祭」をはじめた。

インドからの帰国後から赤十字の活動に参加しており、このときは愛媛県青少年赤十字指導者協議会の常任理事、後に会長を務めた。北京からの帰国後は愛媛県青少年赤十字賛助奉仕団の専門部長として、児童生徒に「人間皆同じ、仲良くしましょう」という気持ちを育みたいと考えて、青少年赤十字活動の一環として植樹祭と異文化に関する講話・出前授業を組み合わせた活動をしている。青少年赤十字（Junior Red Cross）が掲げる3つの目標は、健康・安全、奉仕、国際理解・親善であるが、2度の海外生活を経験した私は、特に国際理解・親善に力を入れている。

前年度のうちに学校長に開催を打診して許可をもらい、その後の実務は教頭や担当教諭と連絡を取り合って進める。実施に当たっては、児童会・生徒会の役員が主体的に動けるように、担当の先生に係分担などをしていただくように依頼している。

学校へは赤十字奉仕団の仲間など複数のメンバーで訪問。植樹では児童生徒への指導を担当してもらい、講演にも途中で参加してもらっている。

単なる講演と植樹セレモニーだけでは一方通行になるので、「木を植える」という行為を通して児童生徒と触れ合うことを重視している。講演にはクイズを取り入れ、一緒に歌を歌う、時折質問と対話をはさむなどして児童生徒の興味を喚起し、気持ちをのせるように努めている。

植樹したいとすぎの横には、「人道・博愛」の標柱を建てている。登下校の際などに横を通る児童生徒がそれを目にするたびに「おじさんが来て植えていた」「インドと中国の話聞いた」「世界の人と仲良くしようと話していた」と思い出すことだろう。植樹祭は一日の行事だが、後から何度も思い出して長く子どもたちの心に残るということこそ意味があると考えている。

実施後に1行アンケートを書いてもらうが、ほぼ全員が「良かった」と書いてくれるなど、おおむね好評である。

植樹するいとすぎの苗木は自分で育てている。植樹できる大きさまで育てるのに数年かり大変だが、それも楽しみのひとつになっている。

毎年5～6校のペースで小・中学校を訪問している。いとすぎの植え時は11月から12月初めに限られるので、植樹祭もこの時期に集中することになる。

2020年は新型コロナウイルスの影響で中止もあったが、晩秋の植樹の時期には感染拡大が下火になっており、いくつかの学校では開催することができた。ある学校では、コロナ禍で多くの学校行事がキャンセルされた後だったので「久しぶりに行事が開催できた」と、とても喜ばれた。2021年は感染拡大も下火になり5校で実施、参加した児童生徒や教職員に感謝された。植樹の由来とともに、人道や異文化理解の大切さが伝わったと思われる。

2018.12.3
いとすぎ植樹祭実施報告

今治市立伯方中学校長 菅 達弘
生徒会(JRC)担当 長瀬 志輝

- 目的 赤十字のシンボルツリー「いとすぎ」の由来を聞き取り、理解し、心に刻みとらえ、生徒に赤十字の理念である人道・博愛の精神を醸成する。
- 日時 平成30年12月3日(月)午前11:30～12:20(50分)
※雨天移行(植樹は実施、生徒会の予定)
- 場所 今治市立伯方中学校 体育館(説明会)、城野(校庭)
- 参加者 伯方中 全生徒および教職員
- 講師 愛媛県青少年赤十字奨励委員会委員長 寺尾 満寿男 様
愛媛県青少年赤十字奨励委員会副委員長 小田 秀則 様
- 会の流れおよび様(司会進行等…生徒会本部役員またはJRC委員など)

- 講師紹介・・・生徒会役員
- 開式あいさつ・・・生徒会役員
- いとすぎ植樹の由来など(20～30分程度)・・・寺尾満寿男 先生
※機嫌操作等の補助はJRC担当役員が行う
- いとすぎの植樹形式・・・講師→生徒会役員(名、苗と標柱)
・・・移動(体育館から城野場へ)・・・
・・・いとすぎ植樹・・・生徒全員、各学級代表者、JRC担当役員、講師
※各学級代表者がスコップで土入れ
- 開式のあいさつ・・・生徒会役員

7. 事前準備

※(1)(2)は学校で準備する

- 説明に関するもの
 - ・ プロジェクター
 - ・ スクリーン
 - ・ 写真撮影(記録用) ※植樹時に全体で1枚、他に1～2枚一員奨励部担任事務員
 - ・ 会場設営
 - ・ 生徒代表2名(標柱いとすぎの贈呈を受けてもらう)
 - ・ ワークシート(講師作成) ※事前に印刷して当日の朝、生徒全員に配布
- 植樹に関するもの
 - ・ 穴の準備
 - ・ 植樹場所を決定する
※生徒の日に触れる場所、水はけのよい場所が望ましい
 - ・ 農業土 1袋
 - ・ 山土 1輪車 1～2
 - ・ わら 2束(乾燥防止)
 - ・ 支柱
 - ・ スコップ(生徒に土をかけるため)
- 講師に関するもの
 - ・ 赤杉の苗・標柱(講師持参)
 - ・ カメラ(講師持参)
 - ・ ノートン・LESBメモリー(講師持参)
 - ・ ギター・譜面台(講師持参)
 - ・ ワークシート(講師作成)



2018.12.3
世界につながる赤十字「いとすぎ植樹の由来」

伯方中学校 年()組()番 氏名()

- 共に歌おう！ 囃歌「幸福拍手歌」
如果感到幸福你就拍拍手 如果感到幸福你就拍拍手
如果感到幸福就快快拍拍手呀 看哪大家都一齐拍拍手

2. 生徒会ウルトラクイズ

	1	2	3	4	5
標柱	紅十字	紅十字	紅十字	紅十字	紅十字
標柱	紅十字	紅十字	紅十字	紅十字	紅十字

3. JRC(Junior Red Cross)ウルトラクイズに挑戦しよう！

問	1	2	3
○ 或 ×			
答			

4. 次の絵画を見たり読書の扉を開いたりして、いとすぎ植樹の由来をせよ！



まとめ

5. Let's sing a song, "YOU ARE MY SUNSHINE"
You are my sunshine, my only sunshine,
You make me happy when skies are gray.
You'll never know, dear, how much I love you.
Please don't take my sunshine away.



6. 今日の学習の一貫感を書こう！

幸福拍手歌

ルーゴオ カンダオ シンフー ニージュウ バイバイ ショウ
如果感到幸福 你就拍拍手

ルーゴオ カンダオ シンフー ニージュウ バイバイ ショウ
如果感到幸福 你就拍拍手

ルーゴオ カンダオ シンフー ジョウ カクカク バイバイ ショウ
如果感到幸福 就快快拍拍手呀

カンナー ダージャー ドワー イーチャー バイバイ ショウ
看哪大家都 一齐拍拍手



**青少年赤十字 Junior Red Cross
JRCウルトラクイズ**

- 中国では紅十字という。
- 国際赤十字の本部は米国のニューヨークにある。
- このいとすぎの苗木は12歳である。

**赤十字のシンボルツリー
—いとすぎ(赤杉)の由来—**



ソルフェーノの丘

いとすぎ植樹祭実施概要・ワークシート(上)、当日に使用するスライド(下)

評価と課題

今治市周辺の小中高等学校には赤十字加盟校が多いが、必ずしも活動に理解がある学校ばかりではない。県下には加盟校のないエリアもあり、その場合の知名度は低いので企画趣旨を伝えるのが難しいこともある。

また、学校現場が多忙で、「日程的にもう行事は入れられない」あるいは「これ以上行事を入れたくない」と断られることもある。

学校によっては、植樹する場所がないほど樹木が生い茂っていたり、育ちすぎた樹木に

困っているところもあり、それを理由に植樹祭だけでなく講演会も断られることがあった。これまでに植樹した樹はおおむねうまく育っているが、1校だけ、岩盤の上に建っている学校で後に苗木が枯れてしまったことがあった。

たった1回の「いとすぎ植樹祭」で、子どもたちに人道・博愛や国際理解の気持ちが育つわけではなく、また、外国人、特にアジアの人々に対する偏見がすぐに消えるわけではない。青少年赤十字が掲げる行動目標「気づき 考え 実行する」の「実行」までできるようになるためには、学校・家庭や地域での継続的な実践的指導や体験活動が必要であると考えている。私自身も、児童生徒の保護者や地域の人々に対しても人権教育を含めた国際理解について啓発活動を継続していきたいと思っている。

青少年赤十字および青少年赤十字奉仕団は、全国の小中高校や各県の奉仕団に繋がっている。そのネットワークを活用して「いとすぎ植樹祭」を県外にも広く伝えていきたい。

しかし現実問題として、受け入れる側の学校現場はとても忙しい。さらに新型コロナ対策に忙殺されるようになってきている。ウイズコロナの時代に合致した新しいやり方を考えていく必要があると思っている。

愛媛県の小中学校には、派遣教員や JICA 海外協力隊などの海外赴任経験者が少ない。地区によっては青少年赤十字未加盟校も多く、管理職や教職員の国際理解教育に対する理解そのものがまだ十分とは言えない。児童生徒に国際理解教育を実施する前に、まず研修会などを通して、教職員を啓発する必要がある。特に、校長や教育委員会等に対する効果的な方法を考えていきたい。

「いとすぎ植樹祭」を引き続き実施していくためには、後継者となる人やスタッフの育成が急務である。個人的に退職校長に声をかけるなどして発掘してきた人材がいるので、積極的に育てていきたい。また、SNS などによる若い人たちへの啓発手段を模索中である。

このほかに、愛媛県青少年赤十字賛助奉仕団では、道徳用教材を作成して学校に届ける活動をしている。これは歴史上の事件や偉人を題材にした読み物教材である。しかし、学校では道徳の教科化にともなって所定のカリキュラムを消化する必要もあり、教材を活用する余裕がないようだ。歓迎されていないと感じることすらあり、今後の課題である。



実践に至った経緯と提言

30代のはじめにボンベイ（現ムンバイ）日本人学校に赴任した。海の近くで育ち、親戚がメキシコにいたことから、子どもの頃から海外への関心や意欲を持っていたが、実際に行く機会はなく、日本人学校赴任時が生まれて初めての海外旅行だった。

日本人学校は複式学級制で、教材・教具も不足していた。在任中に伝染病や大雨などの災害も経験した。その中で、「どんな劣悪な環境下でも、工夫すれば国内に負けないだけの教育活動ができる」という自信がついた。また、自分自身がA型肝炎に罹り入院して同僚や児童生徒に迷惑を掛けたことがあり、教員は健康維持が一番重要であると再認識した。

赴任前は、インドの人々や暮らしに偏見を持っていた。しかし、現地で暮らすうちに、現地の人々のふるまいには理由があることがわかってきて、偏見が徐々になくなっていった。たとえば食事を手で食べるなど最初は信じがたい行為だったが、人の体温にして食べるので口の中を火傷する心配もなくおいしくいただけるし、食後の手洗い用の水も用意されている。むしろ箸で食べるより安全で文化的であり、実は理にかなっていることなのだ

と知って納得した。

定年退職後に、もう一度在外校で教えたいと考え、北京日本人学校に教諭として赴任した。退職前は長く小学校と中学校で校長をつとめていたので、久しぶりに担任として小学生と接することができて新鮮だった。当時64歳だったが、体力的にもまだできると思った。

日本人学校の児童生徒は、特にアジアの人々への偏見が強いように感じた。私も中国に対して偏見を持っていなかったわけではない。対日デモの激しい時期に赴任したので不安もあった。しかし、日本人学校やマンションのスタッフや街の人たちには優しく接してもらい、随分お世話になった。また、公共交通機関のマナーについても悪い噂を聞いていたが、実際は北京のバスや地下鉄では必ず若者が寄ってきて席を譲ってくれた。さすが儒教の国だと思った。国同士の仲は良くなくても、庶民同士はそうではなく、どこかで繋がっていると感じた。

インド在住時代に、ボランティアとして現地の若者に英語を使って日本語を教えていた。その経験から国際共通語としての英語の重要性に気づき、帰国後、通信教育で英語の教員免許を取得した。それ以降は中学校の英語教師として、生徒に英語の楽しさ、特に「しゃべること」の重要性を伝えてきた。

現在教育相談員として勤務している吉海小学校には、将来海外で働きたいという夢を持っている児童もいて、面談では自分の体験に基づくアドバイスや国際的な視野からの進路指導をすることができる。TTとして定期的に授業に入っているので、社会科の「中国やインド」、道徳の「異文化理解」の单元などでは、出前授業の依頼を積極的に引き受けている。

また、県帰国教師の会会長（JICA 海外協力隊経験者も含む）として、会員のための研修会（現在赴任中の先生はオンラインで参加）、壮行会などを主宰。海外経験の共有の場を作っている。

地域の敬老会や婦人会の講演などでも、自分の体験を積極的に語ってきた。その結果、様々な分野に多くの知己を得ることができた。そこから声を掛けられることもあり、今後の生き方の選択肢が増えたような気がしている。これからも地域での発信を続けていくつもりである。

インドと中国の2度の海外赴任は、私にとっては人生観が変わるほどの経験だった。

世界中で日本の子どもたちがたくましく生きていることを知って感動した。

また、国の関係が悪くても国民同士はそんなことはなく、むしろ切っても切れない関係であることも実感した。外国人を偏見の目で見ることがなくなった。

さらに、どんなところでも生きていける、教員としてやっていける自信がついた。どんな児童生徒もかわいいと思えるようにもなった。

個人的には、家族の絆が強くなり、以前にも増して家族を大切に思うようにもなったと感じている。

在外校教員として経験し、学んだことはとても大きい。本人がその使命感を持って、目の前にいる児童生徒、保護者、同僚、そして地域に発信していくべきものだ。管理職は、帰国教師が喜んで発信したくなるような環境作りに努めていただきたい。管理職や行政の理解不足によって、帰国教員の持っている貴重な経験が埋没してしまうケースが多々見受けられるのは、とても残念なことである。

教職が私の天職で、教え子は宝である。これからも学校や児童生徒に関わり続けていきたいと考えている。

世界があるから英語が楽しい

加藤 亜紀子

現在の勤務校等
愛媛県松山市立たちばな小学校

在外での勤務校／帰国年月
バンコク日本人学校／2008年帰国

国際理解教育の理念をベースにした外国語の授業をつくり、実践している。身近な話題や自身の経験から「世界っておもしろい！」と感じさせて、そこにかかわりたいという意欲を喚起し、「この面白い世界を知るためには、伝えあうためのツールとして言語が必要」という外国語の学びのモチベーションにつなげていく。それが、言語獲得のコアになる、と思っている。

実践・活動の内容

バンコク日本人学校（タイ）から帰任した翌年、愛媛県の事業で「授業のエキスパート」として外国語活動拠点校に異動し、外国語の取り組みとして以下のような実践をおこなった。

● 実践1 夢の時間割を作ろう

自分の夢を実現するためにどんなことを学ぶかを、自分で考えて時間割にする。できるだけ英語を使い、本人、グループ、なりきりなどの方法で発表する。

～Activity紹介～

Activity 1

世界・自他との対話・関わりを重視した
外国語活動の授業づくり

My dream schedule!
～夢の時間割を作ろう～
(Hi friends! Lesson8: I study Japanese.)
(We can!1 Unit3→ We can!2 Unit8)
(ONE WORLD Smiles 5 Lesson3: I have P.E on Monday)
～夢の時間わりをつくろう～

- ・時間割って？
- ・「夢の時間割」って？

「夢を実現するため」の時間割をつくろう！

自分のことをおもう、考える時間
人を思う時間

かんごし 大まかに
をなる ための じかん schedule(時間割)!

Why?理由や説明
英語は外国の人が通じやすいようにして、おしゃべりかたをよくなりました。でも料理もちゃんと作れる人になりたいです。そのために、外国の料理の作りかたを勉強したいです。

● 実践2 ワールドパフェをつくろう

世界の果物を題材に、国語科・社会科・家庭科の単元と連携させて展開。まずは自分のために、誰かのために、そしてみんなでひとつのワールドパフェを作っていく。

～Activity紹介～

Activity 2

～英語ノートLesson6「外来語を知ろう」～
「Let's make world parfait!」ワールドパフェを作ろう!

※「What do you want?」→Let's Try!2 Unit7

～単元の流れ～

- ① 身の回りの外来語について知る。
・ 果物の名前→言い方の違い→世界の果物→ワールドパフェ
- ② パフェを作るために必要な会話の方法や果物の言い方を知る。
- ③ 自分のパフェを作る。
- ④ 誰かのためにパフェを作る。
- ⑤ みんなでひとつの「ワールドパフェ」を作る。

導入時の児童の反応とその後の活動

「果物」→「食」＝「文化」として扱う

↓
世界の果物や食べ物への興味→知りたいという思い

↓
調べる

- ・ 自主学习 ・ 国語科「和語・漢語・外来語」
- ・ 社会科「わたしたちの国土」「食料生産」「米作り」
- ・ 家庭科「はじめよう、クッキング!」「ごはんのみそ汁」・ ..との関連

ワールドクイズ・ワールドコーナー …知らないよね。→知ってるかな? →知ってるの? →知ってるんだ!

● 実践3 好きな服を着て Let's go!

衣服を文化としてとらえ、実際に着用することで世界の国々への関心を高め、知る意欲につなげていく。また、自分のスタイルをつくって、誰にどこに何をしに行きたいか発表する。

～Activity紹介～

Activity 3

～Hi, friends! Lesson5「What do you like?」～

「My world style!」好きな服を着てLet's go!

※「What do you like?」→Let's Try!1 Unit4,5

～単元の流れ～

- ① 「衣服」について考える。(文化として捉え、それに反映される地域性や特色、個性を意識する)
世界のいろいろな衣服についての情報を提示したり集めたりした後、実際に身に付けてみることで世界の国々への関心を高める。
- ② 色や形、好きなものを尋ねる言い方を知る。
- ③ My world style を作る。
- ④ 誰かの○○world style を作る。
- ⑤ その服を着て、一緒にどこへ何をしに行くかを紹介し合う。



・布を巻いて服になるなんておもしろいなど思いました。国によって服の色や形がちがうしそれぞれの特徴があるのも分かりました。

・その国の人になったみたいで楽しい! その国で生活しているのを思い浮かべるともっと楽しくなると、本当に行きたくなりました。

↑単元導入時の様子：これがすべての始まり。世界の国の布や民族衣装を実際に身に付け、文化としての衣服や世界の衣装についての驚きと興味を感じることで意欲と見通しをもつことができた。

● 実践4 道案内をしよう

図画工作科、社会科、総合的な学習の時間の単元と連携して展開。道案内のために必要な数字や固有名詞などは、ドリル的な活動を一部取り入れて授業中の英語量を増やした。

～Activity紹介～

Activity 4

「道案内をしよう」～世界のどこかで～

～他教科との連携～

※→We can!1 Unit7. We can!2 Unit6

※→ONE WORLD Smiles 5 Lesson6・8

“Where do you want to go?”

“Where is the station?”

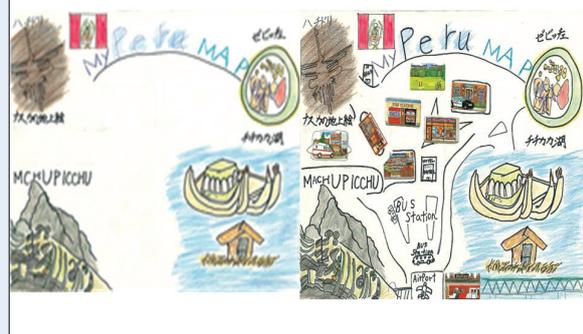
ONE WORLD Smiles 6 Lesson5

“What country do you want to visit?”

ALTと共に…世界を知る！楽しむ！言葉を増やす！
単元の入替えとテーマ設定

Lesson5

Lesson4



これらの授業づくりにあたっては、まず「世界には面白いことがたくさんある。色々な人がいる。それぞれの文化がある。そこにかかわるために英語が必要！」という意識づけを徹底した。前向きなコミュニケーションのための自己解放としてTPR（Total Physical Response：全身反応教授法）などを取り入れ、すべてを英語で行うのではなく要点以外は日本語でも可として「伝える意欲」を最優先とした。その前に「Japanese OK?」と聞くようにして、一瞬でも「英語で言えるか?」を考えるように意識づけた。



評価と課題

これらの実践は愛媛県の事業の「授業のエキスパート」としておこない、愛媛大の教授や英語指導主事から指導を受けた。最初の指導案審議では、「外国語活動よりも人権教育や国際理解教育に寄りすぎているのではないか」という指摘があった。しかし、「世界は面白い、関わる意欲、ツールとしての英語」という取り組みのベースを理解してもらい、多くの学びと指導を得た。

一緒に授業をつくっていったALTにはとても助けられた。「この授業には英語要素が少ない」「今回は世界要素が少なすぎる」などと意見交換しながら、国際理解と外国語の要素をどのようにからめていくかを検討した。ALTは、学校の中でいちばん身近にいる異文化であり、その個性を引き出し、学校の中での位置をつくることも自身の役割だと考え、教職員とのつなぎを意識した。

授業の中では、児童は活動に夢中になるとやはり日本語になってしまう。「英語で言う」

ことを意識させるベースの手立てやルールが必要であり、英語を面白いと思わせることが必要である。そのためにリズムやチャンツ（一定のリズムに乗せて英語の単語や文章を発音する）を使ったり、英語以外の言語も扱い、言語自体の面白さに目を向けさせたりした。

これまで、外国語活動の中にドリル的な活動を取り入れることには否定的だったが、コミュニケーションをとるためにはやはりある程度のボキャブラリーは必要である。そこで、「【実践4】道案内をしよう」では、国際理解と外国語の要素のバランスをとりながら児童が面白さや達成感を感じる形でドリル的な活動を入れ込んだ。

外国語の取り組みでは、コミュニケーションが得意な子や、反対に文法的なことをきちっとやらないと喋れない子など個人差が生じやすい。検証アンケートをとったところ、真面目に取り組み笑顔で活動しているにもかかわらず、2年間ずっと「楽しくない」にマークした児童がいた。ゲームや歌ではなく、言葉のしくみをきちんと学び、きちんと言いたいというタイプだったのかもしれない。こういう子どもは、文法を学ぶ中学英語以降で伸びる可能性があると思う。面白さの感じ方は、児童生徒によって違っている。

現在は教頭なので外国語活動の実践現場からは離れているが、世界のことを学ぶ小5の社会科や代教で外国語やその他の教科を担当する時間は、子どもたちに最大限に世界を感じさせることを心がけている。

現在の外国語教育は、「話せること」が教科の目的化しつつあるが、その流れがある今だからこそ、英語ありきではなくスタートもゴールも世界、という国際理解の理念は重要だと考えているし、その意見に賛同してくれる声も多い。

子どもや保護者が納得する評価のためには、インタビューテストやペーパーテストは必要だが、それが原因で早期から英語嫌いな子をつくってしまうことを危惧している。また、これまでやってきた「関わりの意欲」を喚起するための導入部分にかけられる時間が少なくなるので、活動のコンセプトが弱まってしまふ。子どもたちの学習としての意識が強まることで、ベースにある世界が置き去りになってしまわないようにしたい。そのような状況下で児童の反応を引き出すためには、これらの授業は、普段の様子をよく知っている学級担任とALTによって実施されるのが良いと考えているし、専科教員も児童理解に力を入れてほしいと思う。



実践に至った経緯と提言

学生時代から世界に興味を持ち、バックパッカーとしてアジアやアフリカを歩き、スポーツ人類学で卒業論文を書いた。小学校教員になってからも毎年のようにアジアを旅し、旅先での見聞を子どもたちに伝えながら、学級経営や校務でも常に国際理解教育の視点を入れてきた。

在外校勤務には早くから興味を持っていたがなかなかそのチャンスに恵まれず、2005年によくバンコク日本人学校へ赴任した。大都会なのはバンコクの一部だけで、一歩外に出ると、少数民族や地方の暮らし、匂いがとても面白かった。日常的に市場や屋台に通い、休暇には国境や川に足を運んだ。

タイ北部のチェンマイ補習授業校への出張授業で、国際結婚家庭で母語が定まっていないう児童に多く出会った。多様なバックグラウンドを持つ子どもたちを前に、「この子にとって授業とは、勉強とは、教育とは」について考えるきっかけになった。様々な子どもが共

有しているのが学校という場ならば、そこを楽しい時間に、学びの仲間をいい状態にしないといけないと考えた。

3年間で小4、小4、小5を担当。教育熱心な保護者が多く評価されているという緊張感があったが、教員の努力や姿勢を理解してもらえれば一番の味方になる。すばらしい方々に多く出会い、授業づくり、教材づくりに集中できた環境だった。

イスラマバード日本人学校（パキスタン）から修学旅行でタイにやってきた5人の児童生徒と交流したことは、本当に貴重な体験だった。防弾ガラスの入った校舎や銃を使った避難訓練の様子を知って、学級の子どもたちは衝撃を受けたようだった。同じ海外子女でも国が違えば暮らしが全く違う。その一方で、多くの大切なものと別れて日本を離れて暮らしている子どもたち同士が、想いを共有しあうところもあった。交流の様子を見ながら、恵まれた暮らしをしているように見えるバンコク日本人学校の子どもたちの心情も理解できたような気がした。

小4総合の「現地を知る」単元「見タイ知りタイ学びタイ」は、タイの良いところを探す調べ学習だが、最初のリサーチでは、子どもたちからタイに対して「貧しい」「乞食がいる」などのストレートな言葉が出てきた。そのマイナス意識を払拭するために、日々子どもたちに、バンコクで自分が経験したこと、街の人に助けられたこと、うれしかったことなどを話し、いま自分たちがここで暮らしているのは誰のおかげだろうと問いかけた。アジアの国々との協働は必須であると感じていたし、そのベースをつくりたかった。そのうちに子どもたちの言動がだんだん変わっていくのを実感した3年間だった。

帰任後は、授業内外でますます海外の話題を織り交ぜるようになった。「加藤＝世界」のイメージがあるようで、私が着任する学校では必ず「ワールドクラブ」ができる。世界の遊びや料理を調べて自分たちでやってみたり、言葉を学んだり、ワールドかるたなどの活動をしたりした。どちらかといえば「内向き」の教員が、一緒に活動するうちに海外への関心が高まってクラブ活動を引き継ぎ、自身も積極的に外国語や世界と関わるようになったこともあった。

愛媛県国際理解教育研究会はじめ、様々な場で授業実践報告をしているが、そこで感じるのは「温度差」である。実践のコンセプトや内容を高く評価しつつも、「これは加藤先生だからできること」「わが校での実施は難しい」「時間がない」「準備ができない」という反応が多い。特に現職教員にそのような発言が多いので、日々、現場対応に忙殺されていて、取り組む余裕がないのだろうと思う。

しかし、この実践をそのまま再現する必要はない。コンセプトや実践内容の一部を使って自分なりにアレンジし、「加藤案はこうだが、自分はこうしよう」と実態に即した運用をしてもらいたいし、そうあるべきである。

派遣教員のなかには、赴任国での学校以外の活動に興味を示さなかったり、帰国後の現場への還元や情報発信の意欲を持たなかったりする人もいる。世界には様々な日本人学校があるが、そのすべての学校の派遣教員は、仕事としてある意味「守られた」状態で赴任する。単身異国に乗り込んで自力で仕事を探して生きていくのとは、スタート地点がまったく違う。それを自覚し、様々な場面で「ここが日本と違う」「ここが面白い」と感じて、語りたい、伝えたいことがたくさん蓄積するような3年間を過ごしてほしい。そして、そこに生きる子どもたちと、財産として残るような経験を共有してほしい。

それを持っていると誰かに話したくなるし、何かをしたくなる。もし伝える場がなくて

も、発信したければ探すし、本当になれば作り出すこともできる。日々の業務に忙しくて発信の機会も時間もなくても、普段のふるまいの背後に世界での経験が見えるような教員になってほしいと思う。

コロナ禍やテロが多発する世界のなかで、今の子どもたちは海外や世界に対して「怖い」「危ない」などマイナスのイメージを抱いているようだ。世界に興味を持たず、世界に出ていく若者が減っているとも報じられている。

しかし一方で、今の子どもたちは、生まれた時からインターネットがあって、世界中の情報が身の回りにあるデジタルネイティブである。興味関心の有無にかかわらず、多くの画像や映像に日常的に触れている環境にいる。つまり、「世界情報ネイティブ」である。

であれば、今の子どもたちは、私たち大人とはちょっと違った視点から、世界をフラットに、ナチュラルに見て関わっていけないのではないだろうか。

そうになったら、また次の課題が出てくるだろう。そこで国際理解教育がやはり必要になる。育てたいのはただ「英語が喋れる子ども」ではなく、英語を必要とする場で自己を発揮し、コミュニケーションを図りながら活躍できる主体的対応力を持った日本人である。受容するだけでなく寛容であり、相手を認め、主張し、落としどころを判断することのできる、「異文化に躊躇しない」日本人。在外経験を持つ自分自身がまずそうありたいし、子どもたちにもその力が身に付くように、国際理解教育の内容や方法をこれからも進化させていく必要があると考えている。

ちょっとした違和感から学ぶ 国際理解のための教材集

福森 真一

現在の勤務校等
鹿児島県大崎町立菱田小学校

在外での勤務校／帰国年月
ジョホール日本人学校／2011年帰国

異文化と出会ったとき、違和感や嫌悪感を抱くことがある。しかし、その理由や背景が分かればお互いの理解が進む。こうした事例を鹿児島県海外子女教育・国際理解教育研究協議会では、手軽に使えるワークシートにまとめて「ちょっとした違和感から学ぶ国際理解のための教材集」として発行。ウェブサイト上で公開している。



「ちょっとした違和感から学ぶ国際理解のための教材集」 pdf



実践・活動の内容

国際理解教育では、異文化との違いをプラスの側面で捉えることが多い。しかし、実際に異文化をもつ他国の方々と共に生活していると、日本人のマナーや常識では理解できない言動に出会い、違和感や時には嫌悪感を抱くことも生じる。「ちょっとした違和感から学ぶ国際理解のための教材集」は、あえてここに着目し、日本人が感じた違和感・嫌悪感の元となった他国の方々の言動には、その国の人々なりの理由や背景があることを知ることによって、お互いに分かり合うことができることに気付かせ、グローバル人材としての素地を育むことを目指したワークシート教材集である。

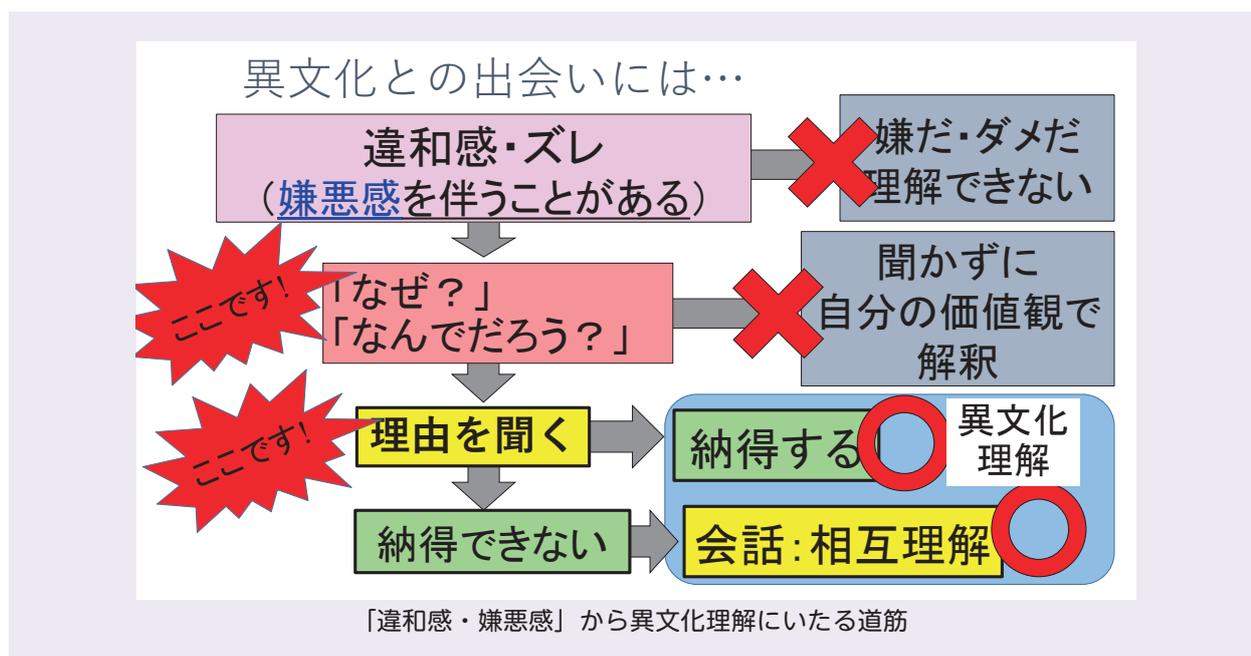
ジョホール日本人学校（マレーシア）での現地校との交流の際に起こった出来事をきっかけに発案・構想した。帰国後に教材化に着手し、マレーシアに限定せずに、日本人学校経験者などから各国の事例を広く集めるところからはじめ、ある程度形になってきた段階で鹿児島県海外子女教育・国際理解教育研究協議会の研究テーマとして教材化に向けて具体的に動きだし、2021年8月に第1版を発行した。

掲載した事例はアジアのものを中心に20件あり、統一したフォーマットのワークシートの形にしている。私自身の体験や調査から得たものもあるが、教材化に取り組んでいることを積極的に周囲に語った結果、趣旨に共鳴した人からも多くの事例を寄せていただいた。

国際理解教育では、児童生徒が、異文化交流や国際理解への興味・関心を高めることができるように、互いに異文化のいいところを知って、理解し合うという内容が基本となることは間違いない。そのため、違和感を直視した教材や取組は少ない。しかし、異文化がぶつかる場所には必ず違和感や嫌悪感が発生する。本教材の特色は、その違和感や嫌悪感が必ず存在することを前提としているところにある。そこから出発して、違和感や嫌悪感を乗り越えて相互理解を進めるためにはどのような視点が必要で何をすべきかを考えるという、従来の国際理解教育を補完するものとなるように意識して作成した。

日本人は共通した価値観をもち、しかもその価値観を他者ももっていて当然だと考える傾向が強いのではないかと考える。そして、他国の方々にもそれを期待しがちである。それが結果的に違和感や嫌悪感、偏見や差別を生むことにつながってしまう原因となっていると考える。「同じ文化をもっていないから違うのは当然である。」と捉えられることが、グローバル人材への第一歩である。

これからの多文化共生社会を生きる子どもたちには、異文化の素晴らしさに気付き、感動する豊かな感受性を育ててほしいのと同時に、現実には美しいものばかりではないということも理解した上で、違和感を乗り越えるための見方・考え方を身に付けてほしいと考えている。その違和感をもったときに、そこで「どうしてそうなのか？」と調べたり、他国の方と対話したりすることができる人を育てたいと考えている。



評価と課題

研修会などで事例を基に違和感について話すと、「こんなことが起きるのですね。」と、興味をもってくださったり、「これは必要な視点ですね。」と重要性に気付いてくださったりする教員が多い。さらに、「これは人権教育そのものですね。」という反応も多くいただく。普段から現場で人権教育に取り組んでいる教員には、この違和感から学ぶ価値を理解してもらえる素地があると感じている。だからこそ、授業の中ですぐに使える教材をつくることが重要であると考えている。

本教材は、2021年夏に、第24回九州ブロック海外子女教育・国際理解教育研究協議会鹿児島オンライン大会で公開したばかりである。現在、鹿児島県海外子女教育・国際理解教育研究会のWebサイトで公開しているので、ぜひ使っていただきたい。すでに使用された先生方からは、「意外性のある生きた内容で、子どもたちがとてもよく考えている。」「分かった時の爽快感が心地よい。」といった感想をいただいている。今後は、「この授業のこの場面で使うと効果的だった。」という情報も共有していきたい。また、内容に共感していただけたら、ぜひ御自身が体験された事例を教えてください、次の第2版へつなげていきたいと考えている。



実践に至った経緯と提言

2007年から4年間勤務したジョホール日本人学校（マレーシア）は、児童生徒数120名程度で、駐在員家庭の子どもが多かった。

国境を接するシンガポールの日本人学校から分かれる形で1997年に創立された当初は通学時間が大きく短縮されることが好意的に受け止められた一方で、「シンガポールの方がよかった。」「この学校ができなければ、シンガポールの学校に行けたのに。」といったネガティブな声も多かったらしい。そのため教員の間では、「マレーシアのよいところを子どもたちに知らせたい。」「マレーシアを好きになってもらいたい。」という意識が代々受け継がれてきていた。歴史や自然環境、伝統芸能、ピューター工場、市場など現地の素材をモチーフにしたオリジナル教材が毎年作られ、私の赴任期間中に総数100を超えた。内容は単なる歴史や自然の紹介にとどまらず、たとえば世界的に厳しい水準で知られるマレーシアのハラール認証と品質管理についての教材など、教科を横断した複雑なテーマについても取り扱っていた。

ジョホール日本人学校の教員は、こうした努力を重ねてきてマレーシア好きの子どもたちが増えているという実感を得ていた。つまり、プラスの情報を与えることでマレーシアへの認識がよくなり、現地理解・国際理解教育が進んでいると考えていたのである。

ところがある日、現地校とのサッカーの交流試合の後、この認識を覆す、ある出来事が起きた。現地校のチームは、いつものように時間に遅れて到着した。現地校は男子チーム、日本人学校は男女混合チームだった。試合後、両チームが握手を交わすとき、相手チームの子どもたちが、男子児童とは握手するのに女子児童の手は握らずにパンとはたいていく。異性と握手をしないというのはイスラム教の教えなのだが、それを知らない（思い至らない）日本人学校の子どもたちは驚き、ショックを受けた。さらに、校庭にゴミをポイ捨てしていく相手校の子どもたちの姿に、「礼儀知らず。」「失礼だ。」と怒った。

当時小学6年の担任だった私は、「文化の違いから生じるマイナスのイメージから、逃げたのではないか。逃げていて、子どもたちは本当にグローバル人材として育つのか。」と考え、直後の総合的な学習の時間の内容を変更し、急遽このことを取り上げることにした。

「普段感じているマレーシアでの嫌なことや、なんでそんなことをするのだろうと思っていることを出してみよう。」と呼びかけると、様々な事例が子どもたちの口から次々に出てきた。「時間を守らない。」「ごみをポイ捨てる。」など、発言は止まらずに30項目以上になった。「パンドラの箱を開けてしまったのかもしれない。」と焦りを感じるほどだった。

次に子どもたちは、学校の現地スタッフに「なぜそういう行動をとるのか」をヒアリン

グした。すると、時間を守らないことについては、「約束の時間ピッタリに行くと、相手の準備ができていなくて慌てさせることになるかもしれないと考えています。遅れていくことは相手への思いやりなのです。」などの答えをいただいた。今までマナーが悪いとか、失礼だと思っていたことが、自分たちを大事に思ってくれているからこそその行動だということが判明して、子どもたちは納得し、驚くほどの笑顔となった。また、「遅れてくることは分かったけれど、約束の時間に遅れることは日本人には失礼だと感じるふるまいであり、私たちは時間どおりがいいのです。」と告げたところ、改善される事例も生まれることとなった。どうしてそうなのか質問することを通して、お互いがお互いの「感じ方」を分かり合えるということを実感することができた経験は、子どもたちのマレーシアの見方を大きく変化させていった。

実際に異文化の方々と生活を共にすると、違和感は必ず生じる。その違和感に出会った瞬間にどういう対応をするべきなのか。その違和感を解決して乗り越える見方・考え方を身に付けておかないと、将来、多文化共生社会で生きる子どもたちが苦しむことになる。このことに気付いた以上、解決策を考えないのは「逃げ」になると思った。

帰国後は鹿児島県鹿屋市の公立小学校へ着任。「違和感」を素材にした教材づくりを本格的にはじめた。在外教育施設への派遣は「長期研修」なので、現場に還元しなければならない。私の場合は、その一つが「事例集」の制作につながった。一緒に取り組んでくれた編集委員は、鹿児島県海外子女教育・国際理解教育研究協議会の仲間たちをはじめ、青年海外協力隊経験者、JICA デスク、ALT、留学経験者など、この取組に共鳴してくれた人々だった。話を聞くと、皆、同じように海外での生活で違和感を覚え、そこを乗り越えてこられた方々だった。

ここまで教材化を進めてきたモチベーションは、使命感ではないかと思っている。

日本では多文化共生社会はすでに始まっていて、子どもたちはその中で生きている。違和感をもって当然であること、けれどもそれは乗り越えられるものなのだとことを知ってほしい。それを子どもたちに体験させておくことは、必ずグローバル人材の育成につながっていく。また、学校でこのことを教えられるかどうかで、子どもたちの将来は大きく違って来る可能性すらあると思っている。

毎年、本県からの派遣教員の歓送会で、この違和感の話をしている。そして「自分が体験した違和感を記録し、『どうしてそうなのか』を質問してください。」と呼びかけている。中には、帰国後、自分の感じた違和感とその背景を報告してくださる先生方もいらっしゃり、この取組の価値を感じている。

本教材集を軸とした取組をもっと広げていきたいと考える。いずれは県をまたいで全国でネットワーク化できないかと思っており、そのためにどんな方法があるかを検討しているところである。

文部科学省委託事業「帰国教師ネットワーク構築事業」
国際理解教育等実践事例紹介

2022年3月

編著者 ▶ 帰国教師ネットワーク構築事業
グローバル教師事務局

発行者 ▶ 公益財団法人海外子女教育振興財団
理事長 綿引 宏行

連絡先 ▶ 公益財団法人海外子女教育振興財団内
グローバル教師事務局
〒105-0002
東京都港区愛宕一丁目3番4号
愛宕東洋ビル6階
E-MAIL : gt@joes.or.jp
TEL : 03-4330-1351
FAX : 03-4330-1355

印刷所 ▶ 株式会社トック企画



公益財団法人
海外子女教育振興財団
Japan Overseas Educational Services